

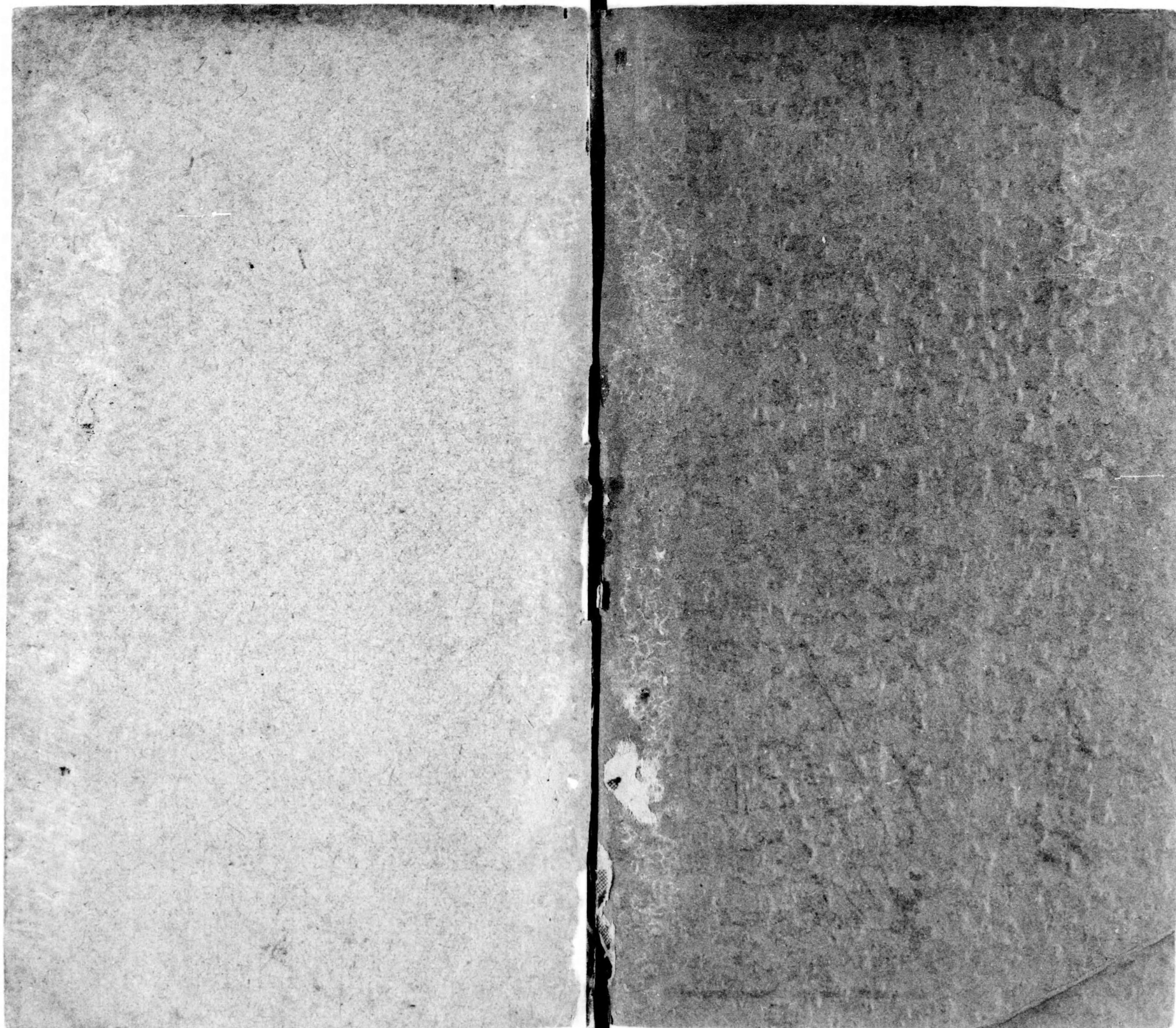
世界の手品と魔術

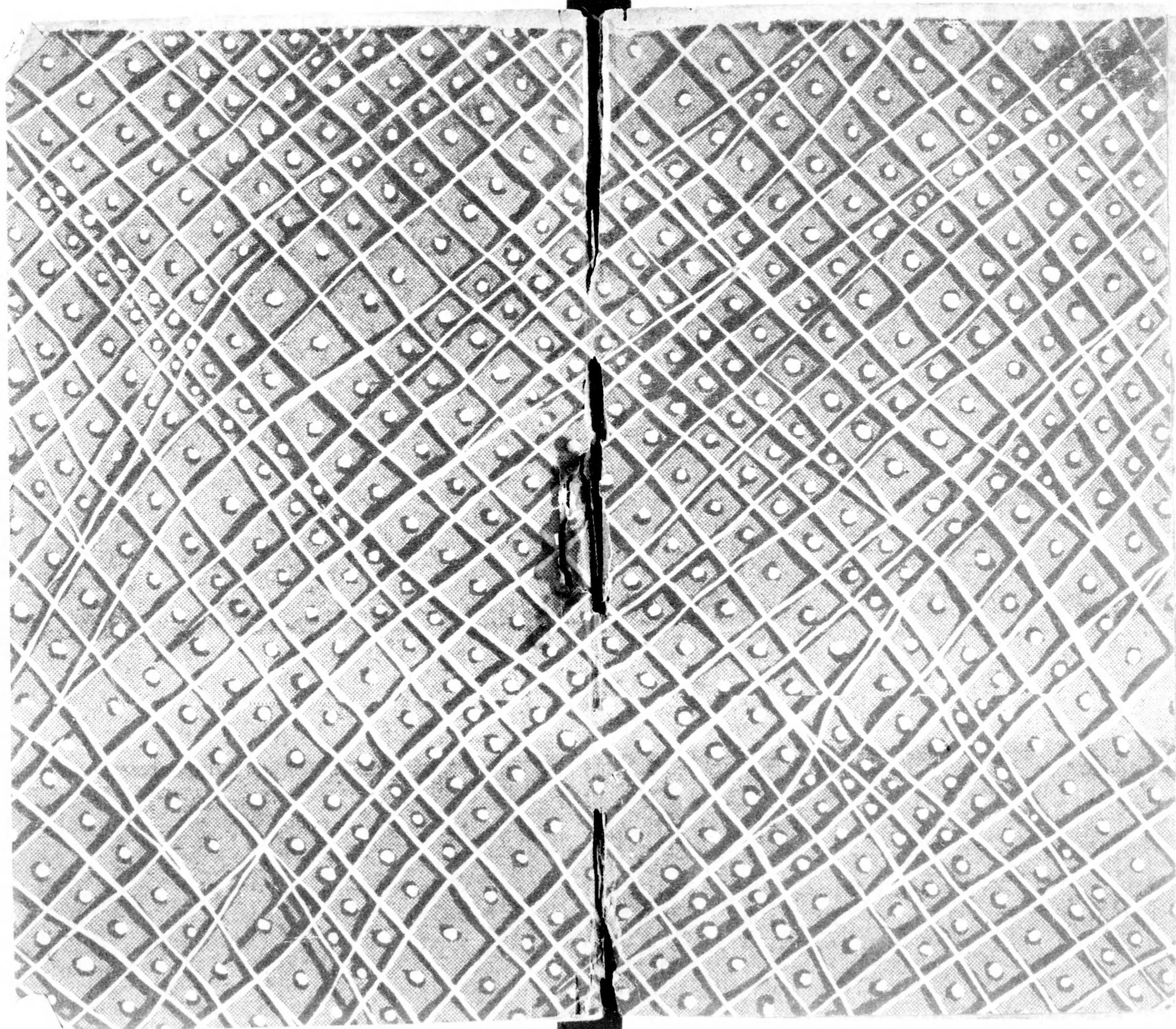


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始





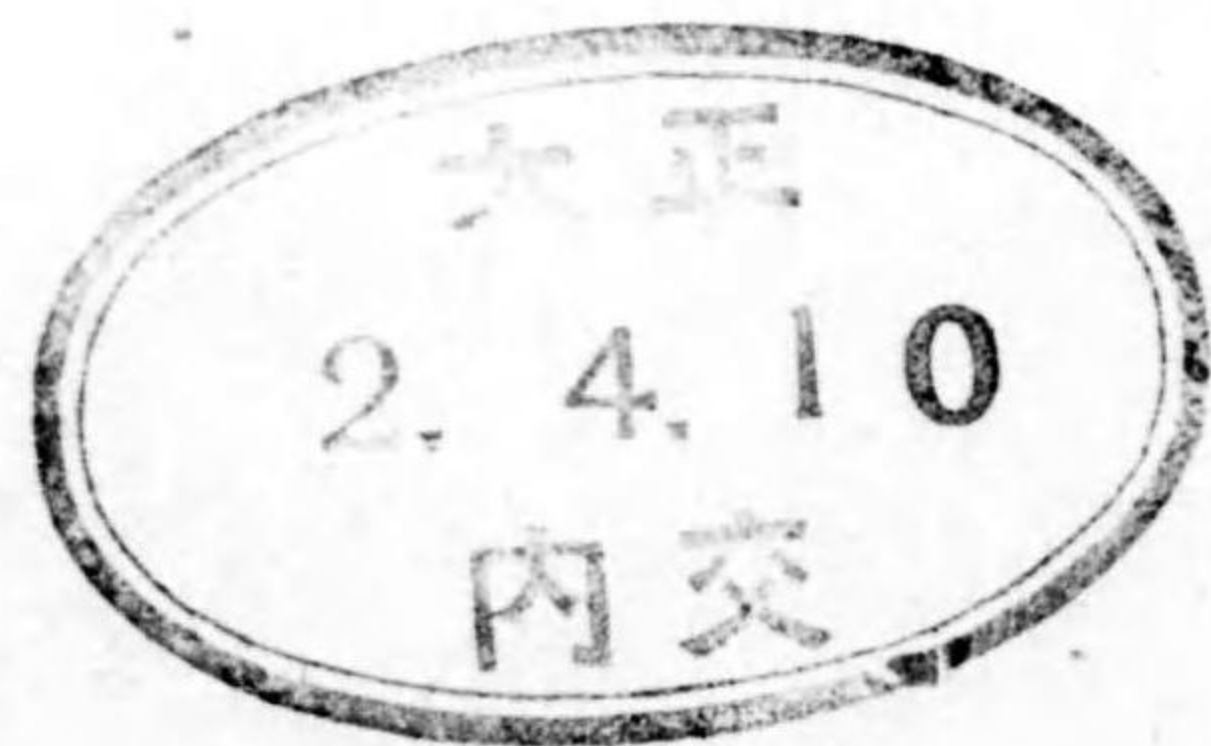


特100

98



と
魔
術



目次

緒言

言

▼機械應用大魔術

一 魔法

の樽

「ソオルスリー、バルレル」

.....

.....三

ピヤ樽に入れた人が早變の術

二 不思議の靴

「マーベラル、トランク」

.....九

袋入の少女靴に入れ術者と入替の術

三 水中の家鴨

「ダック、インウオター」

.....一七

鹽の中に水を入れ家鴨を出す術

四 鳳 凰 閣……「ストレンヂ、ケージ」……………二〇

空の大籠を据ゑ一令の下に人を投込む術

五 大 洲……「イン、ユニバーサル」……………二四

角形の柵内に世界各国人種現出の術

六 魔 人……「デビル」……………二九

美人を突き殺し再び蘇生せしむる術

七 鬼 火……「イグニス、ファチユス」……………三六

水中に陰火燃たつの術

八 昔 嚙 舌 切 雀……「エンシエントストーリー、オブスバロー」……………三六

寶物の葛籠とお化の葛籠

九 浮 れ 太 鼓……「クライメート、ドラム」……………四七

手を觸れず太鼓が鳴いだす術

一〇 變 化 の 鐘……「ベル、オブ、トランスフォーム」……………五〇

手を觸れず心のまゝに鐘を打分る術

二 妖 魔 の 聲……「ボイス、オブ、デビル」……………五五

各種の物體が自然に妙な發音する術

▼時計應用「バート、オブ、ウオッチ」

一 魔法の時計：『ソオルスリー、ウオッチ』……………六

時計の針を随意に止る術

二 屈曲の時計：『モレリー、ウオッチ』……………六一

他人より借た時計を屈曲せしむる術

三 命令の時計：『オーダー、ウオッチ』……………六二

心の如く命令に従ひ時を打つ術

▼貨幣應用『バート、オブ、モネー』

一 孕の銀貨：『ブレグナント、ケンテンシルバアコイン』……………六五

一枚の銀貨を幾個にも増殖す術

二 透明術：『ルツキング、スロー』……………六七

此人の手裡にある錢の數額を觀破の術

三 空蟬：『シエル、オブ、ルカスト』……………七〇

包みたる銀貨を消去るの術

▼動物應用『バート、オブ、アニマル』

一 兎と金貨：『ラビット、エンド、ゴールドコイン』……………七二

兎が金貨に化るの術

二 脱兎の早業：『ランニング、ラビット』……………七五

紙に包みし兎を脱取の術

三 電信 鳩：「ダブ、オブ、テレグラフ」……………七九

手を觸れず籠の中の鳩飛去る術

▼帽子應用「バート、オブ、ハット」

一 慈愛の帽：「ハット、オブ、ピチー」……………八一

帽の中より菓子を出す術

二 大なる富：「グレート、リッチ」……………八四

出てもく盡ぬ帽（一名無盡藏）

三 鶏帽：「ヘンハット」……………八六

帽子の中から夥多の玉子を出す術

▼手巾應用「バート、オブ、ハンドカーチフ」
一 貨幣の交換：「モネー、チェンジ」……………八六

金の置場所を變る術

二 通ひの黄金：「ツイー、バス、アロングモネー」……………九〇

二個の包を一個に合する術

三 帛 鶏 卵：「エグス、インクローズ」……………九二

帛が玉子に玉子が帛に變る術

四 婚約の指輪：「プロミスト、オブ、マールレージ」……………九三

手巾に包みし指輪採取の術

▼雑物應用「バート、オブ、セベラルカインズ」

一 變化 傘「ストレンヂ、アンブレラ」……………六

蝙蝠傘が骨ばかりとなり他の帛と張替の術

二 金 槍 棒「ステック、オブ、デビル」……………一〇二

西遊記の孫悟空の棒の如くする術

三 火 喰 鳥「フアヤ、ボルド」……………一〇四

炎々たる火を喰ふ術

四 浮 玉 子「ツ、フロットエツグ」……………一〇八

玉子を水に浮すの術

五千 里 眼「ウオンダフル、アイス」……………一一〇

人の意中を當る術

▼手練應用「バート、オブ、アーツ」

一 手 練 の 球「スキルフルボール」……………一一三

球を絲に繋ぎ氣合で抜取る術

二 春 の 胡 蝶「スプリング、バツターフライ」……………一二四

紙細工の胡蝶を生た如にする術

三 脱 殻「シエル、オブ、スネーク」……………一二六

繩抜きの術

二三	寶 <small>たから</small> の靴 <small>かぶん</small>	一七二
二〇	智 <small>ち</small> 惠 <small>ゑ</small> の輪 <small>わ</small>	一七〇
一九	彌 <small>や</small> 生 <small>ひ</small> の半 <small>はん</small> 巾 <small>けちん</small>	一六七
一八	盆 <small>ぼん</small> 燈 <small>とう</small> 籠 <small>ろう</small>	一七〇
一七	掌 <small>しょう</small> 中 <small>ちゆう</small> の旗 <small>はた</small>	一六一
一六	變 <small>へん</small> 化 <small>げ</small> 蠟 <small>ろう</small> 燭 <small>そく</small>	一五九
一五	寶 <small>たから</small> の杖 <small>つえ</small>	一五六
一四	魔 <small>ま</small> 法 <small>ぽう</small> の骨 <small>かほ</small> 牌 <small>た</small>	一五二
一三	キウリアストランプ.....	一四九

四	達 <small>たつ</small> 磨 <small>ま</small> の駢 <small>か</small> 落 <small>おち</small>	一一九
五	不 <small>ふ</small> 思 <small>し</small> 議 <small>ぎ</small> の紙 <small>こ</small> 捻 <small>より</small>	一二三
六	強 <small>きやう</small> 國 <small>こく</small> の同 <small>どう</small> 盟 <small>めい</small>	一二六
七	深 <small>ふか</small> 草 <small>くさ</small> の <small>の</small> 水 <small>みづ</small>	一二九
八	實 <small>じつ</small> と嘘 <small>うそ</small> 色 <small>いろ</small> の染 <small>そめ</small> 分 <small>いり</small>	一三三
九	浮 <small>うか</small> れ烟 <small>ぎせ</small> 管 <small>る</small>	一三五
一〇	奇 <small>き</small> 怪 <small>くわい</small> の果 <small>くだ</small> 物 <small>もの</small>	一三八
一一	反 <small>はん</small> 魂 <small>こん</small> 香 <small>かう</small>	一四一
一二	無 <small>む</small> 敵 <small>てき</small> の衣 <small>ころも</small>	一四五

三	電	信	鳩	二二九		
二	脱	兔	の	早	業	二二八
一	兔	と	金	貨	二二六	
▼動物應用之部							
三	空	蟬	二二五	
二	透	明	術	二二四	
一	孕	の	銀	貨	二二三	
▼貨幣應用之部							
三	命	令	の	時	計	二二二

六	魔	人	二〇一	
七	鬼	火	二〇四	
八	昔	嘶	舌	切	雀	二〇五
九	浮	れ	太	鼓	二〇六	
〇	變	化	の	鐘	二〇七	
一	妖	魔	の	聲	二〇八	
▼時計應用之部							
一	魔	法	の	時	計	二一〇
二	屈	曲	の	時	計	二一一

▼帽子應用之部

一 慈愛の帽……………二二〇

二 大なる富……………二二二

三 鶏帽……………二二三

▼手巾應用之部

一 貨幣の交換……………二二三

二 通ひの黄金……………二二四

三 帛鶏卵……………二二六

四 婚約の指環……………二二六

▼雜物應用之部

一 變化傘……………二二八

二 金槍棒……………二三〇

三 火喰鳥……………二三一

四 浮玉子……………二三一

五 千里眼……………二三三

▼手練應用之部

一 手練の球……………二三四

二 春の胡蝶……………二三五

二〇	智恵の輪	二五六
一九	彌生の手巾	二五六
一八	盆燈籠	二五六
一七	掌中の旗	二五五
一六	變化蠟燭	二五四
一五	寶の杖	二五三
一四	魔法の骨牌	二五一
一三	キウトアストランプ	二五〇
一二	無敵の衣	二四九

三	脱殻	二三八
四	達磨の駈落	二三七
五	不思議の紙捻	二三九
六	強國の同盟	二四〇
七	深草の水	二四二
八	實と嘘色の染分	二四三
九	浮れ烟管	二四五
一〇	奇怪の果物	二四六
一一	反魂香	二四八

二五	水	中	の	馳	走	二六三
二四	千	代		萩	二六二	
二三	胡	摩		拔	二六一	
二三	浮	れ		箸	二六〇	
二二	寶	の		靴	二五九	

—(をはり)—

世界手品と魔術

緒言

1 術 魔 と 品 手

魔術は直覺的に、智能を啓發する娛樂中の、最も趣味深き遊戯である、
 觀者は其原理を觀破せんと、推究するが爲めに、勢ひ思考力を増し、其
 智識を研ぎ、術者も亦た、演藝に際し喝采と歡迎を博せんが爲めに、腦
 力の許す限りは考案に考案を重ね、物理、化學、電氣其他の諸科學に涉
 り、諸書を獵り、得んと欲する處は、魔術にありと雖、識らずくの中
 に發明力を膨大ならしめ、世界に屈指の大發明家となつて、世を益した

人もある、本書は爰に見る處あり、編出の魔術は、極めて斬新奇抜にして妙興深く、而して其理と材だに知らば、容易く人の施術すべき、種類を選び、編纂の方法は、兒童の思考力を養成の目的にて、藝題と原理と施術を各別にしたのである、看客それこれを諒せ。

「藝 題」

機械應用之部

一 魔法の樽

「ソラルスリール」

舞臺正面中央に、高さ三尺程の四脚の臺を持出し、傍に大なる一個のビヤ樽を置き、術者は、徐々舞臺に現れ、観客に對し、演藝の説明をなすべし

演 藝 説 明

「爰に演じまする、魔術は、演題を魔法の樽と名づけましたが、元と、

此魔術は、佛蘭
 西の大魔術博士
 ルツボン氏が發
 明致された、「ソ
 フルスリーバル
 レル」と申す、
 世界各國至る處
 で、大喝采を博
 した魔術であり



ます、偕て魔術の徑路
 を簡短に申上ますれば
 舞臺正面に据置ました
 此ビヤ樽、決して材や
 装置はムいません。
 (此時助手は、滑稽的
 の口調で、モシ〜
 と術者を呼び)
 助手「先生……獨り決め



で、此樽に材装置がないと仰やつても無効です、屹度樽の底に穴が空てあるのでせふ」と故意と揶揄ふと、術者は笑ひながら

術「成程、其疑ひも道理……然らば、御



観客の中から、誰何でも、爰へお上り下され、樽の中は勿論、外側から總て御検査を願ひます」

（何人でも構はず舞臺へ上げ樽の検査を行はしめて、然る後ち）

術「偕て諸君の眼前にて、斯く検めますれば、豈夫お胡亂やお疑ひはムいますまい、愈々これより魔術に取掛ります」ト

樂舎より一名の滑稽姿に扮した巨漢を呼出し、観客に紹介した後ち、其巨漢を、術者及び、立會の観客等をして、樽の中に入れて終ひ

「偕て御覽の如く、ビヤ樽内に巨漢は這入りましたが、切望只今蓋を致しますから、嚴重に御封印を願ひます」ト

〔大勢して樽の蓋をして、螺旋鉦で厳しく止めて終ひ、樽を四脚の臺の上に乗せ、術者は、細い棒を持つて、樽の載せある臺の下から、樽の周囲やらを、叩き廻つて聊も脱出の箇處なきを示して〕

術「斯くまで充分に検めますれば、イザこれより魔術を行ひます」ト

〔樽の位置から五六歩隔たり、玩弄短銃を差向け、火蓋を切る、パチン——〕

術「サア、樽の中を極めて頂きます」ト

〔立會觀客や助手等に手助はせ樽の蓋の螺旋鉦を抜き取り、樽蓋を除けば、先に這入つた、巨漢の影もなく、窃寵たる美人が現れ出づるの術〕

であります)

『演術方法は原理材料の部に詳説』

二 不思議の靴

「マーベラルトランク」

舞臺中央に、カーテンを垂しある大なる方形の、籠の如き物を据ゑ置き傍に大形の旅行函靴を置き、術者舞臺に現れ、藝題を説明すべし

演 藝 説 明

『前回に演じましたる、魔法の樽と、原理に於ましては、殆ど同じ様な

處ところがありまするが、これは前回のよりは、餘程奇技な放れ業で、外國の魔術士も、此不思議のトランクばかりは、施術する人は實に、指を屈おつて數へる程しかありません、然れば不肖の私、仕損しそんじましたなら、幾重いくへにも御容赦を、豫めお願ねがいを致いたします……」ト

(靴の方を向いて、蓋を開き、靴の中を觀客に見せ)

術「切望お手數ではありますが、觀客諸君の中から、三四人程爰へ御出張ちやうを願ねがひたいので……」ト

(觀客を舞臺に上げ、靴を検査せしめ、猶、毛縞子製の大袋を持出してこれをも充分検査せしむ)

術「觀客諸君に御面倒を煩はし、靴及び大囊に、怪むべき處もなく、何の装置もないことだけは、充分御了解になりました、これよりは、本藝ほんげいに着手致ちやくしゆします……」ト

(樂舍より盛装したる、小娘を呼出し)

術「只今、呼出しました、此少女を、何人でも御遠慮なく、此大囊の中へお入れ下さい」ト

(何人にも頼んで、少女を囊に容れ其囊の口を固く密封さし印をつける)

術「少女、囊に容れたまゝ、爰に備へあります靴の中に、誰何でも構ひ

ません、お容れを願ひます」ト

(囊入の少女を靴

の内)に投げ込み

トラングの蓋をして、

錠を下し、靴を

グルくと、麻

繩にて縛て靴の

錠及び繩の結び

目にも封印をつ



術「斯く靴の中に入れました、囊入の少女は怎な事を致しましても、身體が煙とならぬ限りは、外へ出ることは出来ませんが、如何になりませふか、これからが本演藝の主眼たる大魔術を行つて御覧に入れます……」ト

(中央に据え置いたカーテン張の籠を、少しく前方に曳き出し、術者は細き竹にて籠の下は勿論、籠の上より周圍まで、叩き且つ拂ひつゝ、特別装置や疑ふべき箇處のあらぬを充分に證據だてる如くに示し、然る後に)

術「観客の諸君よ、私は只今此の靴(少女の囊入)を此籠の中に入れてまして如何なる事を致しまするか、お目留

められ、變化の模

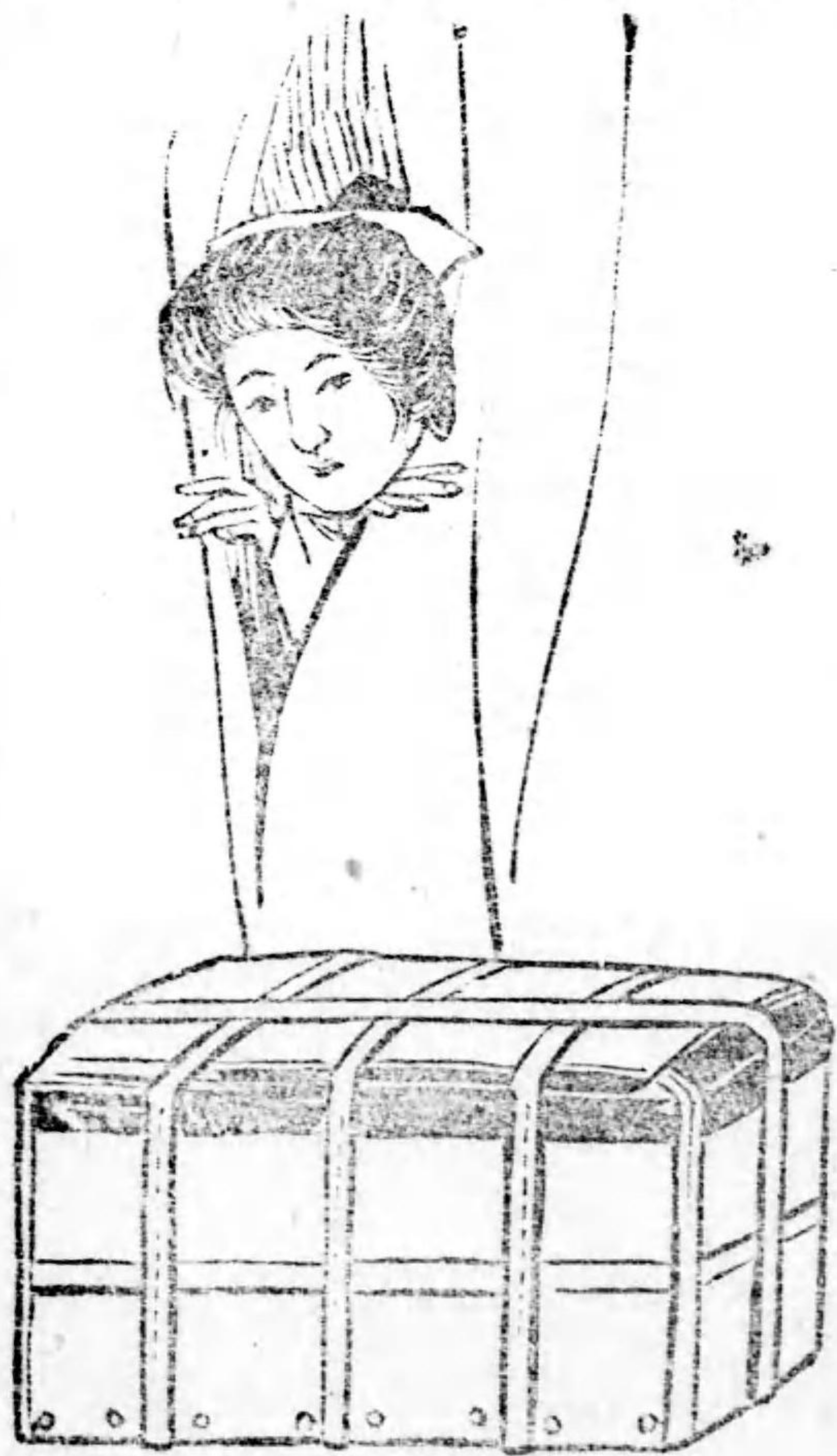
様に因りては拍手

御喝采を豫めお願

ひ致します」ト

術者は、助手や

立會人に吩咐て



靴を籠の中にと容れる、此時直に、術者は正面に垂しあるカーテンを少しく左右に押し開き、僅に面だけを現し

術「一 二 三」ト

掛聲をすると共に、面を隠す、と同時に先に袋に入れられ且つ、靴の中に入れられた少女が、カーテンの間から面を出し

「今日は」ト

「挨拶し、籠のカーテンを押分け、舞臺へ飛出し來るのである、助手は籠の中より、靴を引摺り出して且つ籠の周圍のカーテンを悉く取除け改め見て」

助手「儲て皆さん……術者は何處へ行きましましたかお判りになりますか、又、これなる少女が如何にして囊に入れられ且つ鞆にまで納れられた身を、脱れましたか、總ての疑問は、此不思議のトランクを開きますればお判りになります」ト

(言ひつゝ、錠前の封印や繩の結目等を、再検査を立會人に求めて、徐々に錠を外し、繩を解きて、蓋を開き、囊を取出して、囊の結び目を改めさせ、囊を解けば、悠々として術者は、囊より現はれる巧妙な魔術である)

『演術方法は、原理材料の部に詳説』

三 水中の家鴨

『ダツクインウヲター』

演場の中央に、大なる盥を据え、盥の周圍にある五六杯の荷ひ桶に満々と水を汲み込み置くべし、術者は、一應盥を擡げ、観客に對ひ中の充分見え得る容にして、而して演題の理由を述べたつべし

演題説明

術「原名をダツク、イン、ウヲターと申ます然れば、水中の家鴨と譯しましたがこのは大魔術中の大魔術で、眞個に演じますと舞臺一面を、ポンド(池)に變らし、其池の中に多の家鴨を游泳させるのであります、

却々、其様な大袈裟なる魔術は、些度行ひ難ねまするで、小規模に演じて御高覽に供しま

す」ト

(盃を舊の位置に

置き)

術「此處に据え置

きましたる盃を、

假に池と做らへま

して、水を張り込



みますれば、御面倒ながら、御胡亂と思召す方は、切望今一應盃の中を御検査の上、荷ひ桶の水をお入れ下さいまする様お願い致します」ト



(再々観客に盃を改めさせ、荷ひ桶の水を盃、充滿に張込しめて、術者は盃の位置より、少しく隔たる處に突立ち)「假りに池と做へた、盃の中には、數多の家鴨は游泳を致させます」ト

と高く響くと同時に、盃の中なる水上には數多の家鴨、俄に現れ游泳

(姿勢を正し、短銃一發……パチン……)

するのが、此藝の終りであります」

『原理方法は材料の部に詳説』

四 鳳 凰 閣

『ストレンヂ、ケージ』

舞臺中央に、方形の大籠を、四脚の程よき臺の上に据え置き、周圍にカーテンを垂らし、術者は籠の前に立つて、例の如く演題を説明すべし

演 題 説 明

「爰に演出致しました、魔術は、米國の奇術士ヘンリー、ウイルソンが、

得意の演藝「ストレンヂケ

ージ」を、種々に改良を加

へ、嶄新な趣向を凝らした

獨特の技術で、鳳凰閣と命

名致しました、就ては例の

如く、魔術を行ふ前に、籠

検めから取掛ります」ト

(籠を臺の上に据えたまゝ)

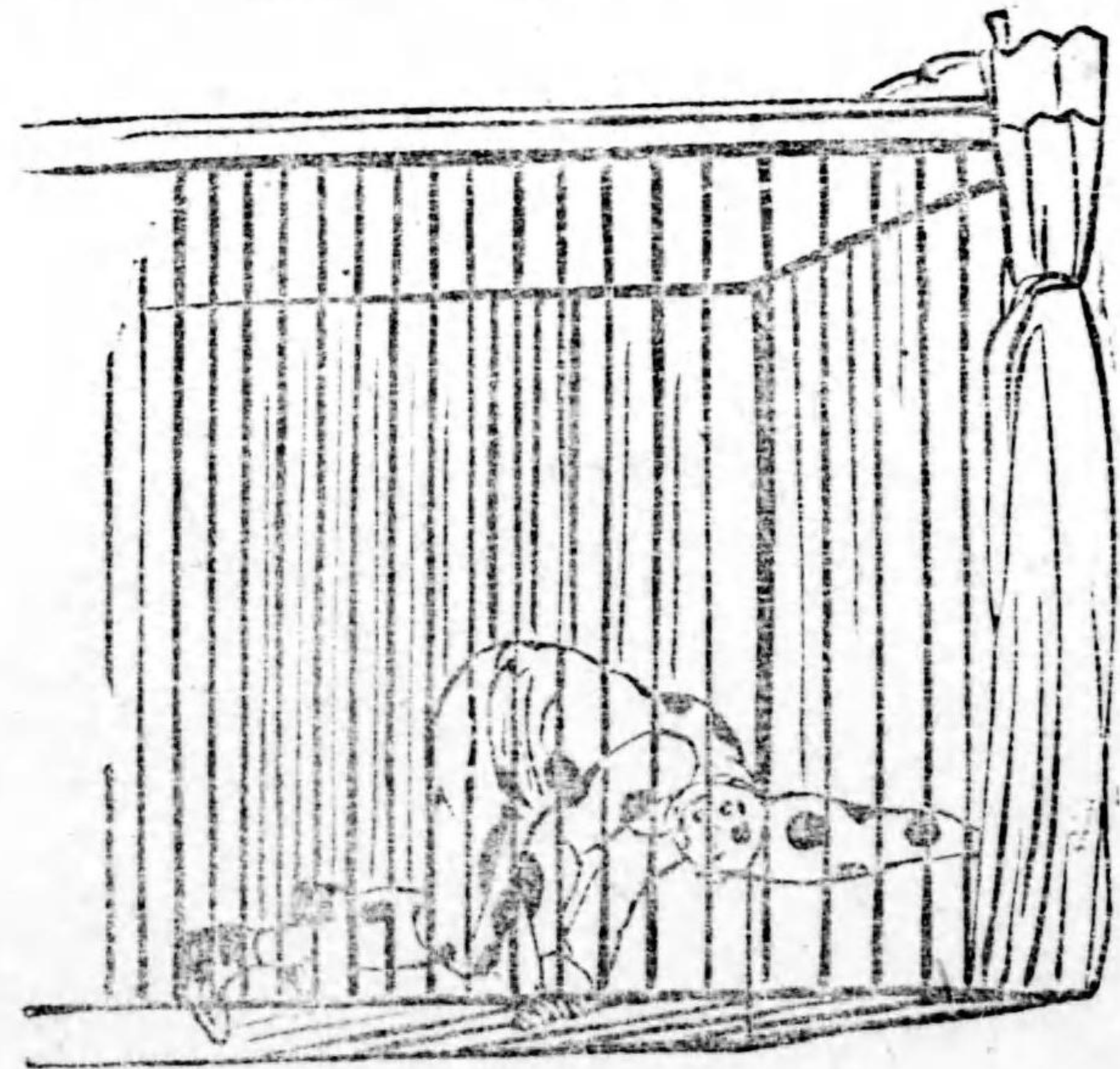
少しく前に曳き出し、カ



カーテンを巻き揚げ、細き竹の棒にて、臺の下を拂ひ、籠の中周囲と充
 分叩き且つ拂ひ、装置
 なく何物も潜み居らぬ
 事を篤と検め、樂舎よ
 り一小兒をば拉來らし
 め、籠の中に放ち、カ
 ーテンは再び舊の如く
 垂らし、術者は、籠よ
 り程よき位置まで放れ、短銃を放つこと例の如く、パチン………と一



發、此響と共に、垂れたる籠の周圍
 にありました、カーテンは一時にギ
 リ／＼と手を觸れずして、巻き揚る
 と、兒は既何時の間にか、逸去つて
 居る其代りに大きな人間が、鳥の眞
 似をして、籠の止り木にブラ下つて
 口中に含みたる笛は、頻りに禽の鳴
 音を發して居る、術者は、籠の傍に
 進み寄り、得々として、籠の扉を開



けば、中なる止り木の鳳凰に擬した助手の人は、飛出し、翱翔まねして樂屋に引込むのが此演藝の終り)

『原理方法は、原理材料の部に詳説』

五 五 大 洲

『インユニーバサル』

演壇中央に角形の四方開きにして大なる籠の如き物を、四脚の臺に据る置き、赤の帛を垂し、これを巻きあげおくべし、術者は盛装して演壇に現れ、観客に一輯し、挨拶済みたる後ち

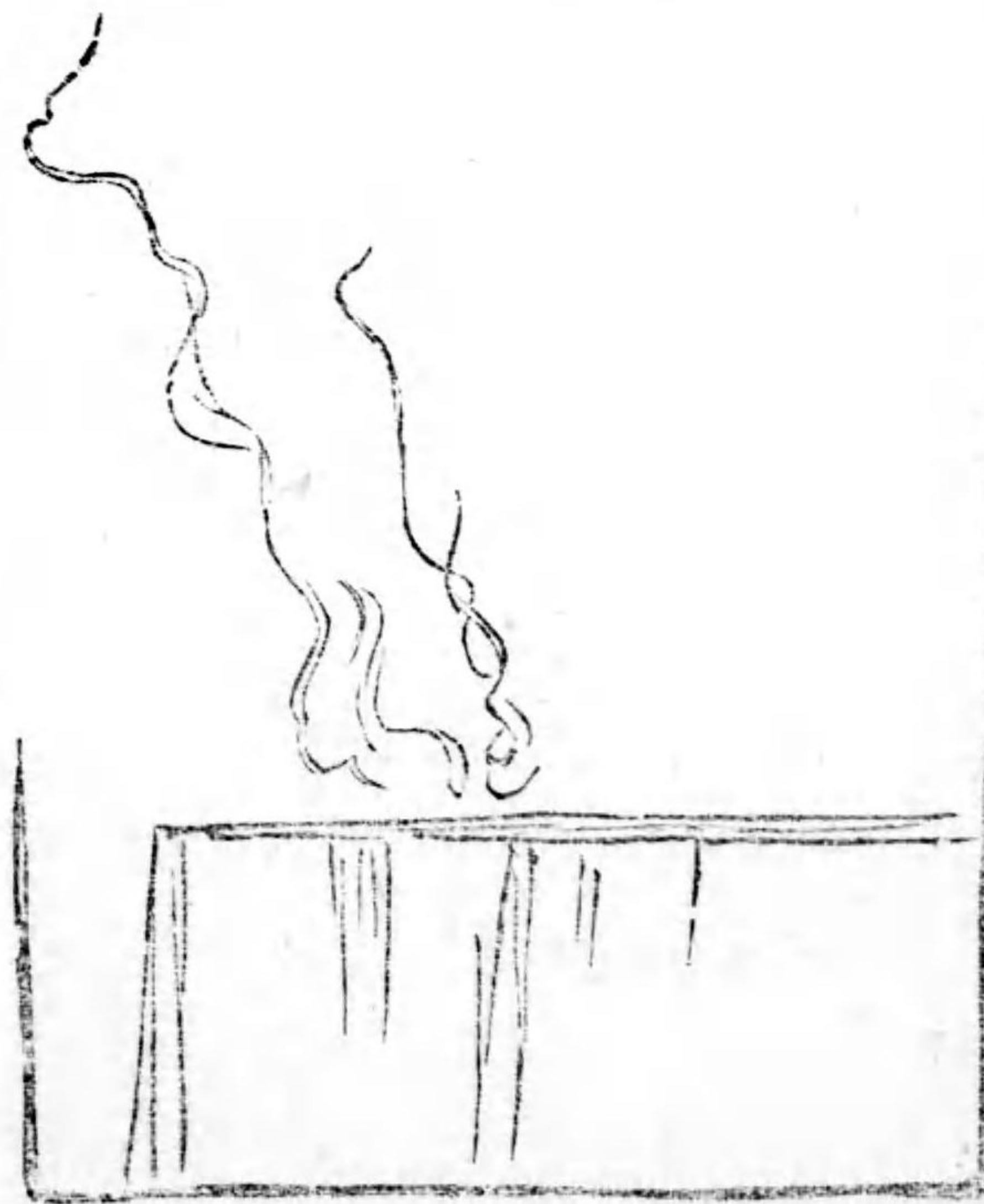
演 題 説 明

「爰に演出の大魔術は名づけて五大洲と申ます、些度、外題が大形過はせぬかと、某人から御心添へがありました、大は小を兼るとか申こともムいませす、小さいよりは大きい方が宜敷からうと存じ、猶且、改題を仕りませすして御高覧に供しまする次第で、併し聊かにても、當魔術が、五



大洲の意味に符合致しましたなら、相變らず御喝采を願ひ置きます、サ
 アこれより、演藝に取掛りま
 す』ト

(樂舎より一名のアイヌの土
 人に扮した、髯むくちやら
 の巨漢を拉し來つて、此土
 人を舞臺に立せ、其間に、
 術者は、細き竹棒にて、例
 に依つて例の如く、籠の四方



の扉を開き
 赤き帛を卷
 きあげ充分
 遠くより見



透しに出來得る様にして、猶
 内側外側の上下を叩き且つ拂
 ひて、全く空籠にして何等の
 装置なきことを示し、然る後に、舞臺に
 立せ置く、アイヌ土人を、籠の中に押しこ
 み、四方の扉を固く閉ざし、巻揚げたる
 赤き帛を垂らし、籠の中は全く見えなく
 なるを待つて術者は、籠より離るゝ、數
 歩、相變らず短銃を、籠に擬して一發バ

チン——、不思議にも響と共に、籠の周囲に垂しある赤き帛は自然に

巻あがれば

籠の中には

土人の影も

なく、支那

人、朝鮮人

歐羅巴人、

亞弗利加人

等あらゆる



世界各国各種の人間に扮装した人々が踏踏をやりつゝ、籠の扉を開けて、演壇に跳り出しつゝ、樂舎に引込むのが此演藝の終り

『施術は原理解の部に詳くあり』

六 魔 人

「テ ビ ル」

舞臺の中央正面の場所に、低き臺を置き、其上に、五六尺の長形の細く編みたる籠(幅と深さは各二尺五寸を超ゆべからず)を据ゑ、而して右の方に一個のビヤ樽を置かしめ術者は輕装勇ましき扮装にて、舞臺に立現

れ臺や籠に、何等の仕掛や、疑ふべき胡亂の箇處なきを、観客に充分改め示し、然る後ち演題の趣旨を述ぶるのである

演 題 説 明

術「デビル」とは悪魔と云ふ意味の洋語で、それを其まゝ、演題に命名したるは、術者「ち私は、演藝中は全然悪魔になつた意志で、人間業を放れた、不可思議な而して殺伐な、演藝で、少女を虐殺し又直に、これを蘇生せしめるなど、恰も生殺與奪の權能を、術者の手中に在る如き一見戦慄すべき魔術であります」ト

概畧の演藝の筋を述べ終ると直に、樂舎より一人の盛装したる、少女

を呼び來りて術者

は、少女の兩眼を

白き布帛にて、目

隠を行ひ

術「汝を只今何々の

咎により、慘り殺に

致すべければ、覺悟

を致すべし」ト

(滑稽交りに死の宣



告を與へ、少女が泣き且つ詫びるも聞容れずして、少女の兩手を縛りて、舞臺正面に据ゑ置たる籠の中に、無理から推し込め、而して、術者は此時より、魔人になつた如くに、凡ての舉動容姿をして、長き劍を引抜けば、夏尙ほ寒き氷の刃、見るから物凄、二三度舞臺に備つけの或物體を、試し斬り或は試し突を行ひ、白刃の鋭くして仕掛なきを示して、術者は一層、森嚴なる態度となつて

「エー、ストー」

(と氣合掛聲をなし、極めて無慘に、籠の前面といはず側面といはず、所撰ばず突き刺すので、籠の中よりは頻りに、苦悶と悲鳴の聲があが

り紅の如き血汐は泉の湧き出たらん如くに、迸り出で、兎角すること二三分乍ち、籠中苦悶の聲はピツタリ止む術者は、莞爾笑つて、觀客に對ひ)

術「觀客諸君、只今籠の中に入れました少女の生命は、慘酷非道なる私の、白刃の下に既に絶れ、彼の女の肉體は蜂の巢の如くに、なつて居るであらふと思召しでういませふが、私は此演藝中は、魔人でありませ、デビルです、生殺與奪は私の手中に在ります、それゆゑ、籠中にて慘殺致した、少女に再び生命を與へ、爰へ呼び出して再び諸君に御目通御挨拶を致させます」ト

(言ひながら、ツカツカと、右の方
に据え置ける
ビヤ樽
の傍に)



進み、樽を轉がし全く空き樽であることを示し、再び舊の位置に復し蓋をなし終ると共に、術者は籠と樽の中央の位置にイみて)

「エー ストー」

(ト再び掛聲して、短銃一發、パチン——此響で、ビヤ樽はバラくと破壊され中より最前、籠の中に推入れられ殺された、少女が現れ、観客席に挨拶をする) 術者は

術「御覧の如く身體鵝の毛で突た、傷もムいません、偕て籠の中は一應如何になりましたか検ためます……」ト

(籠を臺より卸し、蓋を除き逆倒にして検むるも、元より居るべき筈な

き少女、影も容も消え失せて居るのが、此魔人の演藝の終りである」
 『施術方法は原理材料の部に詳説』

七 鬼 火

「イグニス ファチユス」

演壇中央に立派やかな、三脚なる卓を据え置き、其上に、大きやかな硝子製の大形の鉢を置き、傍に二升入程の水差瓶を備え、而して術者は徐々、演壇に現れ、藝題説明にかゝるのである

演 藝 説 明

○「此鬼火と申まする演藝は、大きくなると、なか／＼大仕掛な極めて美事な、魔術で且つ物凄いのであります、然れば、イグニスファチユスの名がつきましましたのであるが、私が只今、爰に演じますは極めて小規模にして、何人にも容易く演じられるのであります」ト

(挨拶が済んだなら、卓の傍に進み寄り、据え置たる、硝子鉢を卸し、充分仕掛なきを観客に検査を乞ひ、然る後に再び卓上に据え、水差瓶を手に取りて、硝子鉢に水を注ぎ入るれば、水が鉢に満々になると、不思議や、炎々と水中に火が燃え上るのが此演藝の終り)

『施術方法は原理材料の部に詳説』

八 昔 噺 舌 切 雀

『エンシエントストーリーヲアスバロー』

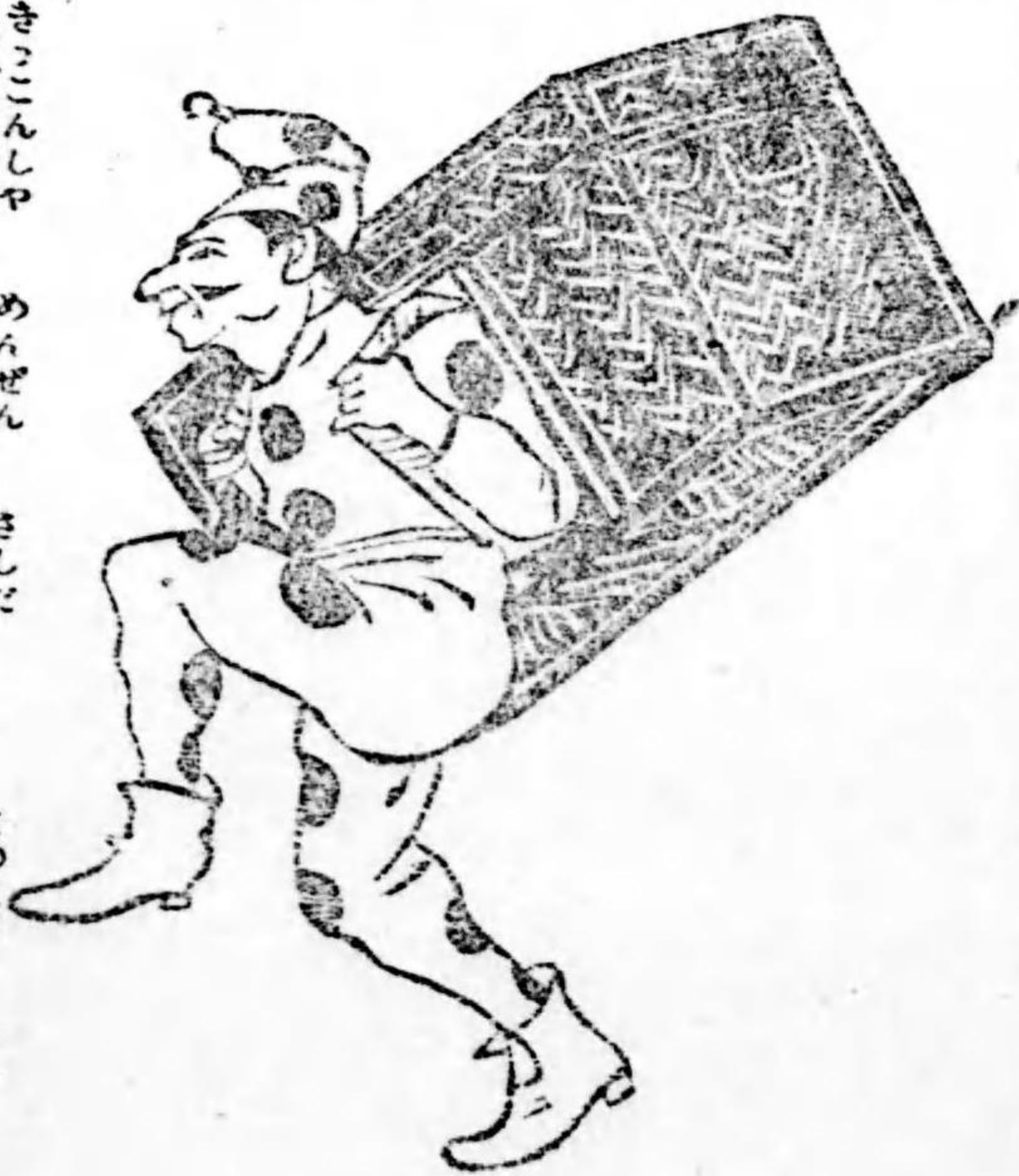
演藝場中央に、一閑張りにて製したる美しき把のついた、葛籠の如き蓋
つきの筐を飾り置くべし、而して、術者は西洋風にも、日本風にも
孰れにしても可なれども、成べく古代の服装にて舞臺へ立現れ、演藝の
趣向と順序を述ぶるのである

演 藝 説 明

○「此演藝は極めて趣味のある、意志で歐米にて有名の魔術士が致しま
す、某魔術を参考として昔噺舌切雀と名づけましたる、其意味を簡

短に申上りますれば、昔噺にありまする彼の、慾の深い老婆が、老爺さん
が秘藏を致す一羽の雀が糊を舐めたとかで、雀の舌を切りて、籠の外へ
放ちました跡で、老爺が戻つて其事を聞いて、大層雀を不憫がつて雀の
行衛を探しに、山へ探しに参り、雀から軽い葛籠を貰つて歸り、開て見
れば澤山の寶物が這入つて居つた、これを羨やましがつて、慾深婆が、
雀の居る其山に参り、猶且葛籠は貰つて來たがこれは重い葛籠、開けて
見れば三ツ目小僧大入道様々な妖怪化物が現れたと、剛慾を戒めるお伽
噺があります。此お噺に似たお噺が西洋にもムいます、即ち、英國の
文豪シエクスピヤの作、人肉質入裁判と申す脚本の中にあります、美人

ポーシアを、戀ひ慕ひ求婚の申込みを致す、紳士紳商數多き中にも、アラゴン公、モロッコ公の二貴族と伊太利ヴェニス商人バツサニオの三人が、最も熱心で、頻りにポーシアに婚姻を迫りますので、美人ポーシヤ一個の肉體で三人に嫁ぐことは出来ませんので、三人の心の醜美賢愚を試めさふと一策を案じ、金の筐、銀の筐、鉛の筐の三個を作り、三人の求婚者の面前に差出し、此筐の中



には妾の肖像納めあり、肖像納めある筐をお取り下された方に、妾は婚姻致しますと申された、三人の求婚者は、成程ポーシヤの言ふのは道理である、一人の身體で三人の心を満足せしめる事は出来ない、斯ふして勝敗を決した上ならば、落第した二人誰になるかは判らぬが、諦めもつくと、言合した様に三人は爾思つて、これを承諾し、偕て、三個の筐の中孰れにしやふかと、三人は暫く思案の末モロッコ公とアラゴン公の兩人は、性來甚だ慾深の人故、金銀の筐を争つて、撰び取り、バツサニオは、精神の潔いな温順い性れの人故、跡で悠々と鉛の筐を撰び、開けて見ると思ひきや、金銀の美しき筐には、美人の肖像どころではなく、鬮

體や其他見るも胸の悪くなる物が入れてあり、パッサニオの擇んだ外觀の醜い鉛の筐の中に、美しきポーシャの肖像が納めてありました………とか申す昔噺がふれます、そこで私は、西洋の昔噺と、日本のお伽噺を折衷して、演藝に脚色しました』ト

（長々しき口上を述べ、舞臺に据置し葛籠を持出し、蓋を除き、觀客に全く空にして且つ、装置なきを示して、四脚の臺の上に載せ）

術「諸君、只今お検めになりました葛籠は一個であります、重きも輕きも自由になります、まづ最初は重き葛籠に致しますれば、何卒觀客諸君の中にて、誰何にても脊力の御自慢の方は御遠慮なく、此葛籠を持ち

上げて下さいまし』ト

（觀客に請ふのである、好奇心に驅られて觀客中の或者が舞臺に上り來らば、術者は其人に向ひ）

術「貴君は此葛籠の重量を幾百貫あると思召す」

（と頭から途方もない問ひ振をするので誰でも莫迦くしく思ふ、鳥渡見た處では甚麼に重く見ても一二貫目は超えぬのに幾百貫——とは餘りに大仰らしいので、大抵は答も出來ず笑つて居る、術者は至つて眞面目の態度と口調を保つて）

術「何故答えて下さらんのです、ア、判つた定めし輕いと思召してか……」

術「サア如何です、重いでせふ到底もお一人やお二人三人四人乃至十人の力でも、揚ることは不可能せぬ、虚言や法螺と思召めすなら、御遠慮なく、何十人にも舞臺へお上り下されて持あげて下さい」ト

（観客席に揚言致しまするので、時に十数人の観客が上つて来て、葛籠を持あげんと力を極めますが、猶且五分の隙さへ持上りませぬのを、術者は冷かに見て笑ひながら観客席に再び向ひ）

術「怎れ程、御登場なされた數多のお客様がお力を振ひましても、所詮

……これは斯見えましても、確かに千貫目以上ムいます、虚と思召すなら、御面倒ながら、お試しを願ひます』

（斯く）
言ふ
ので
観客
は冗



戯と思ひながらも、始め烏渡持上げかけて、其重きに愕き兩手を掛け果ては兩脚を踏張り、渾身の力を込めて持揚げんと焦れども、葛籠は恰

も盤石の如く釘付にでもなつたる様に、ピリとも動かない。此時魔術者は

動くものではムいませぬ、恐らく常陸山鳳梅ヶ谷の如き人物が數十人か
 かりましたら如何でせふか……然し、斯く云ふ私に限りては、玄妙不
 可解の大魔力がありまするに因り、斯様な、重量葛籠も容易く、僅に一
 本の指を以て、持ち揚げます』ト

（観客立會人を、葛籠から退かせ、術者は）

『エー スト——』

（と長く引く大聲の氣合掛聲をして、再び葛籠の傍に進み寄り、人差し
 指一本を葛籠の把手に掛け、軽々しく持揚げた後ち）

術「お客さん、私の一令の下に斯く軽くなりました、モ一怎んな、お子

供衆でも容易に揚げる事が出来ます、サア揚げて御覽なさい……」

（ト再び持揚げさせれば、不思議や葛籠は僅に五六斤程の最も軽い葛籠
 と變り一同を愕かせるのが、此演藝の終り）

『施術方法は原材中に詳説』



九 浮れ太鼓

『クライメイト、ドラム』

舞臺程よき處に、大なる太鼓を紐にて吊し置くべし、術者は樂師風の服
 装に打扮て演壇に現れ

演題藝術の説明

術「此魔術は、佛國式でやると魔の太鼓と名づけ、演藝は何となく凄愴陰氣にゆくのですが私が演ずるは、極々陽氣に賑かに花々しく行ひますデ演題も、浮れ太鼓と申ました、これは別段六ヶ敷魔術ではありません爰に持出した、二の撥、これを太鼓の傍に置きます、まづ、太鼓及び二本の撥充分のお目を留められて御一覽を願います」ト

(撥を袋に入れて、太鼓の下に置くと、太鼓は、手を觸れずして、術者が)

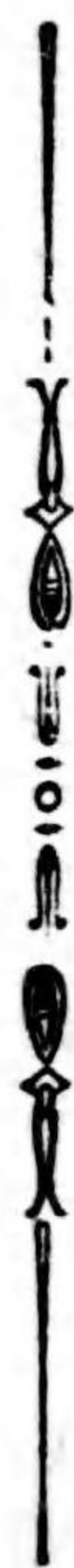
術「陽氣にやらかせく」ト

(號令すれば、角力甚句の如な打ち方を太鼓がする、又術者が)

「止め——」ト

(停止を命すれば、鳴り止んで、再び命令すれば打ち、種々に鳴り渡り斯して術者は止れり號令で、太鼓の音を止め、撥を納れた袋を取り上げ、袋を開けば、いつしか二本の撥は失なつて居る、これが演藝の終局である)

「施術方法は原理材料中に詳説」



一〇 變化の鐘

「ベル、ラフ、トランスフォーム」

演場中央に、吊鐘を、程よく二筋の絹糸紐にて結びつけ、高く吊しあげ
 凡ての準備、成るを待つて、術者は演壇に現はれ、観客に軽く敬禮して
 説明にかゝる

演題説明

術「爰に演じまする、變化の鐘は、殆ど前回に演じました、浮れ太鼓と
 同じ様でムいますが、聊か前回と異ります特色は、能く爰に吊しありま
 する鐘は、人の吉凶禍福を豫知し之を豫言致します、尤も此鐘、尋常一

様平凡通例な……ト

（少しく可笑味ある滑稽態度と口調を用ひ）

術「鐘とは事異り、抑も今を去る事二千幾百年の昔、即ちビーフオアク
 リスト紀元前千幾年のその月、ナイル河の河底から揚つた不思議の鐘
 能く人の語を解し、又人の發音する如に凡て何事をも語ります」ト

（口から出放題な法螺と虚言を列べちらし）

術「偕てこれより、私が鐘に對つて種々なる質問を試みますが、豈夫人
 語を解し人の如く發音すると申しても、鐘が人の舌端で喋舌まする様な
 發音は出來べき理由はありません、譬へば私が、（爾であるか）と質問す

る場合に、鐘は質問に就て、爾であると答へる場合は、三ツ續打をする
 爾でないとき答へる時には四ツ打つのであります、而して其他其鳴響く發
 音が少々にても、人の語るに似たる處がありましたら、拍手御喝采を願
 ひます』ト

（豫め演藝の筋を述べ而して、観客の中より年若き男子一人を舞臺へ上
 げ、術者は、鐘に對つて物言ふ如く）

術「コレ〜鐘よ今爰に登場を願つた、お客様は、女であるが、果して
 爾う思ふたなら、豫定の如く三ツ打續けをしる、若し違ふと思ひ爾でな
 ければ四ツ續け打にしるツ」ト

（命令すれば、鐘は手を觸れずして、撞木は揺動だして、カン カン
 カンと四ツ續け打つ、術者は笑ひながら）

術「判つたか、感心々々、爾でないと合圖の打方をする處をみると男だ
 と言ふのだな、いかにも男だ……併し此お方が、幾歳だか、知つて居
 るか、倘し知つて居るならば、大きく一ツ、鳴れ〜」

（命令を術者がする言下に、鐘は、ゴーンと音高く響く）

術「知つて居ると挨拶をしたからは、幾歳だか當て、見ろツ、併し一定
 の申つけをする、澤山の數を鳴り響かれても騒々しいから一を十歳とし
 て、二ツ打てば二十歳、三ツ打てば三十歳開して此順で一打を十歳づゝ

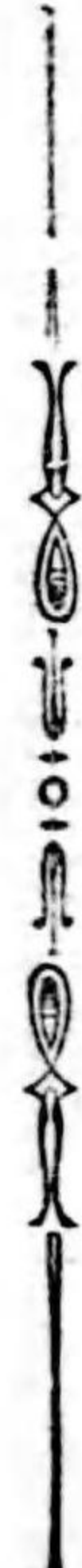
増殖し、端数はまけてやるから、十臺だか二十臺だかそれとも四十五十乃至六十臺の御老人か、打つて見る』

（此吩咐を恰も鐘は人語を聞分る如く、ガン、ガンと二打をする、術者は其觀客に對ひ）

術『如何でムいます、二十歳臺でいらつしやいませう』ト

（問へば爾であると觀客の答を聞て然る後ちに、種々な打法をさせ、恰も鐘が心あるが如くに演ずるのが、此藝の終り）

『施術方法は原理解の部に詳説』



一 一 妖 魔 の 聲

『ホーイス、オフ、デビル』

舞臺正面に大なる卓を据ゑ、其上に金屬製のコップ、像型、花瓶其他、陶器類を除き種々な品物を羅列し置き、準備、全く整ひて後ち術者は、藝壇に立ち現れ

演 題 説 明

術『觀客の諸君、本魔術は、浮れ太鼓或は變化の鐘と皆な同一の學理を應用したのでありますから、殆ど其演藝も大差はムいませぬ、开して別段、目先の華々しい面白い、趣味のある魔術ではありません、たゞ學理

一方の魔術ゆるる聊か學生方の参考にならうかと、術者が特に演ずる次第で、演題が、妖魔の聲だとか、化物の聲だとか申ましても、大した事を致すのではありませぬ、たゞ、御覽の如く舞臺正面に備へつけました、卓上の諸物が、手を觸れずして、奇妙な音聲を發するのであります」

(演藝の筋を演述し了ると共に、演者は一々卓上の物品を、観席を持つて行つては検めて貰ひ、舊の位置に据ゑ、悉皆検め終ると同時に、術者は、卓を離るゝ十數歩にして、隠袋から短銃を取り出し、一發パチン——、響と共に、一齊に卓上の諸物品が奇妙な唸りを生じ、恰も化物屋敷へでも行つた如くに、花瓶コップ等が、舞臺中空を飛びながら

唸り響くこと、數分術者は

「ストップ——(止れ)の

(號令を下すと同時に、諸物品は舊位置に復し唸りもピツタリ止むこれ此藝の終局)

「方法は原理材料の部に詳説」



「舞臺及び座敷手術」

時計應用之部

一 魔法の時計

『ソールスリー、ウオッチ』

本藝は極簡易な魔術場所を擇ばず、舞臺でも座敷でも、往來でも庭園の中でも何處でも出来る、道具は一枚の直径二尺程の圓形硝子板を、術者は手に提げて、演場に現れ簡短なる説明を試むべし

演藝の説明

術「原名が「ソールスリーウオッチ」と申ます一名魔の時計と名づけました、斯様に御覽の如き硝子の一枚板を圓く切り抜き、見透と相成り、何處に装置を致す處もムいませぬ、然るに諸君の中にて何時にしると、

御指揮がありますれば、術者は、手を觸れずして、此硝子板の周圍にI

よりXまでの數字が

ありますが、中央に

あります、針の端は

何時の處にても屹度

止めて御覽に入れま

す」ト

(何時が注文である

か、觀客に問ふ譬



へば五時、六時、三時等と、観客より聲が掛りしならば、其中三つ四つの註文を聞き容れ、硝子板の時計を、助手に吊し持たせ、術者は、中央の時計針を、ブンマワシの如くにクルくと廻し、針の廻つて居る中に、三時なり、六時なりを、指さし

「止れ——」ト

（號令すれば、勢よく廻つて居る、時計は命令された數時の處にてピツタリ止ること、何遍やりても皆な同じ、これが演藝の終）

「施術方法は、原理材料の中に詳説」

二 屈曲の時計

「モレリー、ウオッチ」

此術は魔術と云ふべき程の、手術ではありません、たゞ光線學の應用を子供衆に示すのであります、然れば舞臺でなくとも何處でも出來ます、術者は、簡單に、此理由を述べ、直に、演藝にかゝるので

術「誠に御面倒でありますが、観客諸君誰何にても、お持合せのお時計を御拝借を願ひます、決して粗忽の輕燥な取扱ひは致しません」ト

（観客席より一個の懷中時計を借り受け、熟々と眺め、さも愕いた風を装ひ）

術「甚だ失禮でムいますが、指の端で自由自在に屈曲て御覧に入れます」

ト
 (種々な滑稽可笑の臺句を言ひながら屈曲て見せ、然る後ち原形の如くして、借受けた観客に、其時計を返戻するのが、此演藝の終り)

「施術方法は原理材料の部に詳説」

三 命令の時計

「オーダー、ツイウオツチ」

本藝は、魔法の時計と鳥渡同じ様であります、これは真物の懐中時計

を用ゐるので、術者は演壇に立つて、簡単に演藝の筋を述べるべし

演 藝 説 明

術「此魔術は、樂舎中の時計ではお慰みが薄ふムいます、御面倒ながら、御客様から御拜借致したいのであります」ト

(観客の中より、懐中時計を借り受け、鎖を持って時計をブラ下げながら)

術「これは言ふまでもなく、懐中時計であります、柱時計とは違ひ、時を報ずるに鳴響く譯はありませんが、術者が魔術を施しますれば能く此懐中時計は人語を解し、時を報じて呉れます」

(言ひながら、懷中時計の蓋を開き、針を眺め)

術「只今は七時四十分でムいます、能く御覽を願ひます」ト

(時計の蓋を開いたまゝ、觀客の大勢に見て貰ひ、然る後ち、術者は演
場程よき位置の處に突立ち、鎖を持つてブラ提げ)

術「私が今、時計に命令をしますから、能くお聴取りを願ひます、ア、コ

レ時計、只今何時何分であるか、打つて見なさい」ト

(命令をすると、不思議や、懷中時計は、チン チン チンと正しく七

點を報じて、暫く止み、又チンチンと四度鳴る)

術「七つ報じましたは、即ち七時を示し、跡にて四度び鳴りましたるは

四十分で、決局七時四十分を報じたのであります、何卒御喝采の程を願

ひます」ト

(術者は觀客の喝采を得て、件の時計を借受けた客人に返戻するのが、

此演藝の終り)

「施術方法は原理材料の部に詳説」

貨幣應用之部

一 孕の銀貨

「ブレグナントシルファコイン」

至極簡單な手術で別段道具も装置も要しませず、初心の素人方にも出来る、然れば術者は演藝場へ立現れ

術「諸君よ、術者は歐米諸國を修業致し遊歴の決果非常なる、有利の魔術を覚えて歸朝仕りました名づけて、孕の銀貨と申ます、婦人が子供を生みますると同じ様に、銀貨を孕ませる法を發明しました一枚の銀貨がありますれば、これを孕ませ幾枚にても銀貨を産み出させます」ト

（言ひながら、觀客より五十錢銀貨を借り來り、左手の掌の上に載せ、右手を擴げ空拳であることを充分、客に見留させ、然る後に、左右の掌を合して、頻りに擦ること二分間ばかり）

術「エー、スト——」ト

（氣合を掛けて、合せた掌を放てば一枚は二枕となり、再び一枚を舊の如く掌にする磨擦すること前の如く、掌裡の銀貨は又一枚増殖二枚は三枚三枚は四枚と幾枚にても際限なく増殖のが此演藝の終局である）
「施術方法は原料原理の部に詳説」

二 透 明 術

「ルツキング、スロー」

此術も至つて簡易な、造作もないことで、別段何等の道具も要しません

術者は、演壇に現はれ

演題説明

術「透明術と名づけましても、決して實際に、物體を X 光線の如く、術者の眼が透徹つて見へる特別な視力が具備して居る譯ではありませぬ、初等算術の原理を解するならば怎んな子供衆にも出来ませぬ、

（説明が済んだ後ち、術者は、若干の銀銅何種にても貨幣を掴み、又これを観客の誰にても、同じ様に掴ませて、其人に向ひ）

術「貴郎のお掴みなされた、貨幣の数は、偶数であるか、將た、奇数であるか、御面倒ながら、術者に知らせぬ様に、密と員数を御検め置き

下さいませ」ト

（其數を指えて貰ふことを依頼し置き他の観客に對ひ）

術「術者は未だ、此お方がお掴みに成ました貨幣の員数が、偶数であるか、奇数であるかを未だ承はりませぬ」ト

（固く斷わり、又も若干の貨幣を掴み前に掴みたる貨幣と合せ而して、其合計數が偶であるか奇であるかを檢して、観客の、掴んだ數の偶数であるか奇数であるかを問ひ其人若し奇数なりと答へたならば、兩者の和は偶数なり公言して、其數を檢めさせれば果して、それは屹度偶數である、恰も掌中に掴みある員数が透徹して指へると同じに當るの

である」

「原理は後に詳しく説く」

三 空 蟬

「シエル、ヲブ、ルカスト」

舞臺なり座敷なり、演藝する場所の中央に、三脚の小形の卓を据え、其上に硝子コップや水差、半巾等、此演藝に必要な凡ての物品を置いて準備整ふや、術者は、演壇に現れ観客に一揖し然る後ち、演題の説明をなすべし

演 藝 説 明

術「前回に二三演じました手術よりは稍、手術の巧妙を要し従つて趣味も深ふムいます、演題は空蟬と申しまして、つまり藻抜の殻を意味致すのでムいます」ト

(言ひながら、卓上に在る硝子コップを手にとつて、傍の水差を右の手に取りて、満々とコップの中に注ぎ入れ、一個の銀貨を、投入し、観客の中から誰人でも一人拉し來つて、半巾を以て固く、コップを蓋をして貰ひ、術者は遠く隔たりて)

術「只今お観客様にお願ひ致して、斯く半巾にてコップの蓋をして頂き

ました、然れどもコップの中に在るか無いか、眞個投げ入れましたそれとも入らないのかは、只今投入しました時カランと音の致したのでもお判りでもありませんが、今一度、コップを振り動かして御覧に入れます」ト
(コップを揺動かしてカラン〜と音をたてる)

術「豈夫斯くまで、檢あますれば、お疑ひはありますまい、これより只今、コップ中の銀貨を美事に抜取りまする」
「イエー、ストー」ト

(掛聲氣合をいたして、半巾を取除ければコップ中の銀貨は藻抜の殻となり術者はコップの水を棄てるのが此藝の終局)

「施術方法は原理材料に詳説」

動物應用之部

一 兎 と 金 貨

「ラビット、エンドゴールドコイン」

舞臺正面に普通用にて、手術用の三脚卓にても差支えないが、兎も角一個の卓を飾り置き、術者は樂舎より、成べく深い玻璃製の大鉢に、糠を山盛にして、これを持出で演壇中央に立ち現れ、説明にかゝるべし

演 題 説 明

術「此藝はラビツトエンゴールドコインと申ます、不可思議なる奇術で只今爰に持出しましたる糠は、見る／＼中に、一羽の兎と變化を致します、されども、一應は例に因て例の如く、検査を致しまする」ト

（糠の這入り在る大なる糠箱を持來り、件の玻璃製の大鉢の糠を、此箱の中へ悉皆あけて、空になつたなら、件の鉢に種仕掛なきを充分に觀客一同に示したる後ち、鉢を箱の中へ入れて再び山盛りに糠を盛りて卓上に置き、眞鍮製の蓋をして、術者は三四歩後方に退き、隠袋から短銃を出して鉢を望んで一發、パチン——術者は蓋を取除ければ、糠は消散て、中より一羽の兎が飛出すと術者はこれを捉へてプラ提げ觀

客に對ひ

術「只今糠が兎に化けましたが、此兎今一品變らせ御覽に入れます」ト
（兎を件の鉢に入れ、蓋を被らせ）

「イエー ストー」

（一聲の氣合と共に蓋を取除けば、兎の姿皆くれみえずして、中より數多の金貨（玩具品に）ゾロ／＼と現れるのが、此演藝の終り）

「施術方法は原理材料の部に詳説」

二 脱兎の早業

舞臺正面に演藝卓一脚
 コンマンシヤルテーブル
 普通卓一脚を列べ卓の
 上に兎を入れた兎籠を置て
 術者は樂舎より大形の紙を
 携へ演壇に立現はれ、演藝
 の説明にかゝる

術「脱兎の早業と題しまし
 ても、決して籠の中の兎が

「ランニング・ラビット」



演壇を駆け廻ると云ふ意味ではムいません
 兎が甲の位置から乙の場所に、瞬間にして
 移りまする處から、脱兎の早業と題しまし
 た、偕て愈々これより演藝に着手致します」

ト

（籠より兎を出し、観客より借り受けたる
 帽子を兎に被せて本卓の上に置き普通卓の上で携へ來りし大
 なる紙を擴げて、帽の下より兎を出して、ブラ提げ來りて紙に拮纏み
 て一の包となしこれを携へ観客席近くへ進み寄りて、術者は）



術「諸君子よ、只今現に御面前に於て、兎は紙包と致しましたるが、兎は斯く窮屈に紙包に致されましたるを、甚だ迷惑に思ひ、卓上の帽子の下に、既に、逃げ戻つて居ります……」ト

（言ひつゝ紙包を漸次と壓し且つ揉み潰すと果ては膨らみたる包はピシヤンコとなり術者はこれを擴げれば、兎は影もなく舊の紙片でありませ、此紙を裂き破りながら卓上の帽を取除けば、下よりは兎がいつの間にか跣んで居ると云のが、此演藝の終りとなる）

『施術方法は原理解の部に詳説』

三 電 信 鳩

「ダフ、オフ、テレグラフ」

舞臺正面に、二脚の演藝用卓を置き、孰らも一個宛の禽籠を据ゑ、中には、甲なる籠には白き鳩、乙なる籠には黒き鳩を入れ置き、準備整ひしを待つて、術者は舞臺に現れ、説明すべし』





術「本藝は西洋各國にて、今日の如く飛行機だの無線電信のと、これほど文明の利器が発達して居らぬ時代、戦争の場合には、能く軍用として平素訓練して置きましたる、鳩を放ちて彼我の交通音信を致し、名づけて軍用電信鳩と申す、術者はこれに聊か則りましたので、斯くは名づけました」ト

（言ひながら甲の籠を指さし）

術 此籠の中に居ります鳩は御覧の如く白色鳩で、又向の卓にありまする籠の鳩は、黒色鳩で、いりますることを、確と御見覚え置を願ひます」ト

（言ひながら、双方の籠に白き帛を被せ）

「ワン ツー スリー」

（と掛聲して覆ひたる白帛を取除ければ黒き鳩は白き鳩の籠に入り白きは黒き鳩の籠に入れ替つて居るのが、此演藝の終り）

「施術方法は原理材料に詳説」

帽子 應用之部

一 愛 慈 の 帽

「ハット、オブピチー」

舞臺でもお座敷でも演場中央に、一個の卓を置き、術者は徐々と演場に立現れ、説明にかゝる

演 藝 説 明

術「大分今夜のお客様方の中には、お少さいお坊ちゃんやお嬢様方が澤山に見えますデ、ハットオブピチーと申す、奇術を演じ、お菓子を御馳走致します、就てはお客様より一個の帽子をお借り受け致したいので」

ト
（観客より一個の帽子を借り受け）

術「これがお菓子製造の器でムいりますが、何うせ製造致しますには、何

でもお子供衆方から三品四品御注文を願ひましたる方が、お慰みが深うムいます、切望何でも御注文願ひます」

（と帽子の中より出すべき品を注文を乞ふ観客席より種々な雑多なる品名を言ふとも、材に限りあれば、準備の四五の種類を紙片に記し）

術「まづ第一が、金錫焼、第二がビスケット、第三が最中、第四が羊羹、第五がカステラ、其他御注文もムいますが、幾種出すも同じ理窟でありますから、兎に角紙片に記しましたる五品だけを取敢へず製造にかゝります」ト

（言ひつゝ、観客より借りた帽子を二度三度揺り動し上下にすること三

四回

「イエー ストー」

（の例の如き掛聲をしては、順次に菓子を取出し、約束の品々だけ残らず出限たれば其品々を観客の子供等に與へるのが此演藝の終である）
「施術方法は原理材料の部に詳説」

二 大なる富

「グレート、リツチ」

演場に一脚の卓を据ゑ其上に、ソツファーと名づくる柔かい畳み込の

出来る帽子一個を載せ置き、術者は、演場に立現はれ

演藝の説明

術「術者は、某魔人から、不思議の奇法を授かりました、名づけて、大なる富と申ので何故爾う藝題を名づけたかと云ふに、此帽一個がムいませれば、何品でも思ひのまゝに取出し決して盡ることがないのであります」ト

（言ひながら、卓上の、柔軟帽を手に取つて疊んだり裏返しにしたり、冠つて見たり、卓を帽で叩いたりして居る中に、観客の正面に向ひ帽の中が空であることを一應示しながら帽の中から、林檎だの密柑だの

鶏卵だの何やかと、種々な品々を取出し、殆ど帽中は無盡蔵の如く見せかけるのが此演藝の終局である」

「施術方法は原理材料の部に詳説」

三 鶏 帽

「ヘン、ハット」

演壇には一脚の卓を据え置き、其上に一枚の白き布帛を載せ、術者は演壇に立現れ、説明をすべし

演 藝 説 明

術「術者は養鶏事業を致しまするに、實に有利有益なる發明を致しました、一個の帽子さへありますれば、幾千の鶏卵でも容易に獲ることが出来るのであります、何卒御面倒ながら、お客様方お持合せの帽子を御拜借が致したふムいます」ト

（観客席より一個の帽子を借り來りて卓の上に載せ、備えある半巾を被せ帽子の中へ手を入れて、數多の鶏卵を取り出すのが此演藝の終り」



「施術方法は原理材料の部に詳説」

手巾應用の部

一 貨幣の交換

『モネー、チエンジ』

舞臺正面の位置に大なる卓を据え置き、上には二枚の半巾を載せ、術者は演場に現れ、説明をなすべし

演 藝 説 明

術「これは簡單なる奇術で、題は讀で字の如く貨幣の置てある其位置が

變るだけでありませんが、貨幣は、我々樂舎内より持出したのでは御興味
が薄い、御面倒ながら、二十錢なり五十錢なり、銀貨を御拜借願ひたい」

ト

（術者は一人より五十錢借受けたなら他の一人よりは二十錢なり二錢銅
貨なりを借り來り、これを卓上に二尺位づゝ離隔して列べ）

術「右に銀貨、左に銅貨列べあります、御見覚え置き下さいまし」ト
（念を押して、貨幣の上にて一枚づゝの半巾を載せ）

『イエー ストー』

（の號令氣合で、半巾を取り除けば銀貨と銅貨とは全く其位置を異にし

て居るのが此藝の終り」

『施術方法は原理材料の部に詳解』

二 通ひの黄金

『ツーパーミアロンダモネー』

演壇には卓を据え置くべし、術者は藝壇に立現れ直に簡單なる説明をすること例の如し

演 藝 説 明

術「前回に演じました奇術と殆ど同一の筆法でムいませるが、目先は鳥

渡異つて居ります藝題は、通ひの黄金と名づけました、就ては観客様方に御面倒ながら、貨幣と手巾を御拜借を致したので」ト

（観客より、貨幣、手巾等を借り受け來りて、各一個一個を、手巾に包み、其一端を一人一人に持たしめ、術者は）

『パッス——』

（と氣合を掛ければ二個別々一個宛よりなき手巾の中には二個合して居るのが、此演藝の終局）

『施術方法は原理材料の部に詳解』

三 帛 玉 子

「エクス、イン、クロース」

演場えんぢやうに在る卓たうの上に、一枚まいの袷あはせ帛きんを置き、術者じゆつしやは演場えんぢやうに立ち出いで説明せつめいにかゝる

演 藝 説 明

術「これは前回演ぜんくわいじました、雞帽にとりぼうと同じ奇術てじなでたゞ帽子ぼうしを用もちりませぬのみで、御覽ごらんの如ごとく、爰こゝに一の帛きんがムいます、篤とくと檢あらため御覽ごらんに供きようしますする」

ト (一件くだんの帛きんの一端たんを持つて、卓たうに屢々しばしば叩たたきつけ、或あるひは絞しぼり、決けつして帛きんに仕

掛かけなさを示しして)

「エー スト」

(の氣合きあひを掛かけては、澤山たくさんの玉子たまごを出だすのが此演藝このえんげいの終をまり)

「施術方法やうりかたは原理材料たねわかしの部ぶに詳解くわしく」

四 婚 約 の 指 輪

「プロミスト、オプ マーレージ」

舞臺ぶたい若もしくは演場えんぢやうに何物なにものをも据置こゑおくの必要つたえなく、術者じゆつしやは直ちに簡單かんたんの説明せつめいをなすべし

演 藝 説 明

「此奇術は、甲種、乙種と二様あります。依てまづ最初は甲種より演じます。」ト

「演べて、観客の一人より指輪を、借り受け、左の手の怎の指にでも篋めて、能く観客に見せしめ。」

「確に御拜借の指輪は、左の中指に篋めました。これを右の手に移します。が、怎の指に篋めませふか。お指揮を願ひます。」ト

「観客の命するまゝに、篋替え。」

「只今首尾よく演じました。これは甲種プロミストオブマーレー」

「ジと云ふ奇術でこれからが、愈々乙種の術に取掛ります。」

「観客より半巾を借り、術師は、指輪を右の手の指にて摘み、借り受け。た絹ハンケチをかけて、これを観客席より撰み出したる一人に持せ。」

「ワン ツー スリー」

「(の氣合で、持たせある手巾を術者が受取り見れば、既に手巾に包みたる、指輪は消え失せ、其人の指に篋り居るのが、此術の終りである。)」

「施術方法は原理材料中に詳解」



雜物應用之部

二 變化傘

「ストレッチ、アンブレラ」

演場程良き位置に据え置く卓上に空の壺と一本の蝙蝠傘を載せおき、術者は立現れ、蝙蝠傘の特別装置や種仕掛なきを観客一同に知らしむる爲め、簡短の説明をなすべし

演藝説明

術「これは此傘が恰も變化の如き働を致しまする處より以て演題と致しました、如何なる事を致しまするかは、演じての上お了解りに相威りま

するが、まづ第一お願をお客様に致するは、此蝙蝠傘を特と御検査を願ひます……」ト

(観客に充分に検めさせ次に傍の空壺を手にして、中を充分これまた検めさせ然る後に、観客席より一枚の絹手巾を借り受けて、これを件の空壺の中に推込みて、検査済の蝙蝠傘を、護謨引布の囊に入れて卓上に置き、先に手巾を入れた空壺をあければ、手巾は消え失せ、替る蝙蝠傘に張りたる帛のみ、骨より放れて這入て居る、そこで囊から蝙蝠傘を取り出せば、不思議なる哉、骨ばかりとなつて、一本一本の骨には、壺中より消え去りたる、借り受けたる絹手巾は断片的に切り裂

かれて、結びつけられて居る」

術「如何でムいます、これで變化傘の魔術は終りました」ト

「言ひ棄て、樂舎に行

かふとするを、助手な

り後見人なりが呼留め

て術者に向ひ」



術「先生、此ま、樂舎へ逃げて行つては不可ません………怎うにか此場の解決をつけてから行つて下さい」ト

「さも迷惑らしく掛合ふ、術者は不審らしき顔して」

術「モ一手術はこれで済んだのです」ト

「平氣で居る後見は躍氣となつて」

術「冗戲言つて、は不可ません、貴郎がお客様から御拜借した、手巾を斯如に斷裂して終つて其儘にされて行かれては、私がお客様に申譯がありません、原作如りにしておいでなさい」

「と叱るが如く恨むが如に言へば術者は笑いながら」

術「ア、其事かえ、其事なら何も爾なに心配することはない、今それじや術者が原状にして上ませふ」

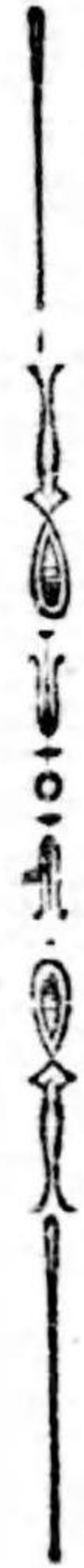
（と言ひながら、蝙蝠傘の骨に結びつけたる手巾の断片を取り集めて、これを紙に包で火を放ち燃やして灰となし件の空壺に推込み蓋をなし蝙蝠傘は再ぞろ囊に收め、先に手巾に替りたる、傘の帛を燃やしてそれが燃切り灰となると同時に

「イエー ストー」

（の掛聲と共に、壺を開ければ、借受けた手巾は聊かの毀破もなく出で又囊より骨のみの傘を取り出せば、舊の如く帛が張りつめてある、こ

れが此奇術の終り

「施術方法は原理材料の部に詳解」



二 金 槍 棒

『ドラツク、ヲアデビル』

舞臺で此奇術を行はんと欲せばなるべくは背景を深山か若くは西遊記に因みたる圖を描かせ、術者は、西遊記の孫悟空に扮装し、猿の面など被りて、細き長い棒を携へ、樂舎から立現はれて、藝題の説明すべし

演 藝 説 明

術「私は恁んな子供衆でも御存じであります三藏法師の高弟、猿の化物孫悟空の末一萬代子孫に當る、空々寂々と甲者であります、當人名の如く至つて、屁の如な人間で空々たる奴では無いますれど、先祖悟空から傳來の、金槍棒は肌身放さず所持して居ります此棒不思議にも、私の思ふがまゝに長くもなれば、短かくもなります、一時は十里先の人間でも叩くことが出来ます *



* 又一時は短くして耳の穴へ差込むことが出来ます、併し能書ばかりでお判りにもならず第一お慰にもなりません、早速實地

に行つて御覽に入れます」ト
 (術者は三四度、携へ來れる、棒を観覽席の處を持廻り、検査を乞ひ然る後、術者も亦た、舞臺の上や、壁や卓、何でも構はず其邊に在る物を叩き歩き、愈仕掛なしと認めさせ)
 『イエー スト』
 (と大なる氣合を掛ると共に棒を耳の邊りにあて、三四遍術者はクル〜と成べく



早歩はやあしに廻まはり歩あるけば不可ふか思議しぎにも、棒ぼうは箸はしの如ごとき小せうなる物ものに變へんじ、一應いちおうこれを觀客けんかくに見みせ、再またび箸はしの如ごとくなりたる小ちひさき棒ぼうを、手荒てあらく五六回振くわいぶり乍ながら駈歩かけあるけば先さきに持もち來きたりし時ときの長ながさより殆ほとんど倍はい以上いじやうに延のばして、一禮いちらいをして樂舍がくやに引退ひきさがるのが此演藝このえんげいの終をり

「施術方法やりかたは原理材料部たねちゆうぶに詳解くわんげ」

三 火 喰 鳥

「フアイヤボルド」

演壇中央えんだんちゆうかうの位置ちに、普通卓ふつうたを据かゑる置おき其上そのうへに火鉢ひばちを置おいて、炎々えんくと燭ほのほの立たち

騰ほのりますまで火ひを勃おこして置おきます、凡すべて準備整じゆんびとふるを待まちつて術者じゆつしやは徐々しゆくく壇上だんじやうに立たち現あらはれ、火喰鳥ひくひどりと題だいしたる理り由いを簡短かんたんに述のべし

演藝說明

術「只今此處ただいまこゝに於おいて演えんじまする奇術てじなを、何故なぜ火喰鳥ひくひどりと命名めいしましたかと云いふに、



遠くアフリカ加邊の某國にはフアーヤボルドと申して火を喰ふ鳥があるそ
うで、未だ術者は、爾な不思議な鳥は見た事はありませんが、鳥でさへ
も喰へると云ふに、萬物の靈長たる人間と生れ喰へぬ筈がないと考へ、
種々試したり研究を積みますると、ナニニ造作もなく火などは喰へます
ものです』ト

（言ひながら、火鉢の火を積み重ねみたり崩したりなぞ致し、パチ〜
と火花を散らしながら、火箸で、眞赤に勃つて居る炭火を、口唇まで
挟でフツフツと吹きながらバクリ〜と口中へ入れ、モガ〜と
嚙りさも美味物でも喰ふ様に、喰終り）

術「如何でムいます、お客様方も一つ召食りなされては……」ト

（可笑みある口上を述べて居る中、急に両手で腹部を抑へ苦しむ真似を
して）

術「アツ熱い〜大分臓腑が焦げて来た、コリヤ耐らぬ〜」

（と駈け廻りながら、口中よりブツブツと火の粉を吹き出しながら樂舎
に逃げ込むのが此演藝の終り

『施術方法は原理材料の部に詳解』

四 浮 玉 子

『ツリ、フロット、エツグ』

舞臺正面に三脚の卓があります、卓の上には深い硝子製の、筒形の鉢を載せ、傍に水差の瓶を備へ置き、猶美しき容器に鶏卵數個を入れ、凡ての準備成るを待つて、術者は舞臺に現れ、簡短なる説明をなすべし

演 藝 説 明

術別段に當奇術は、奇抜でもなく又大して面白い演藝として御覽には入れ難ねますれど、玉子は曰すと知れた、水に浮ぶべき筈の物でない、それが容易く浮ぶのは、如何なる理窟であるか、詰り化學の應用の如何

を、お子供衆方が、御合點なされば、術者はそれが満足であります、早速ながら、玉子は一應御改めを願ひます、決して空洞になつた、蛋白や黃身のないのとは違ひます、真正正銘の鶏卵——ト

(言ひながら、數個の玉子を觀客席を持廻りつゝ、檢めて貰ひこれを卓の上之列べ、筒形の容器の中へ、其中の玉子一二個を客に入れて貰ひ然る後ち、水差瓶の水を、筒形の鉢へ満々と注ぎ入れば不思議なるかな、今の今まで、筒形の鉢底に轉がつて居た玉子は漸次々に水面にと浮き揚るのが此藝の終)

『施術方法は原理材料に詳解』

五 千 里 眼

『ウオシターフルアイズ』

演藝場程よき位置に、卓を置き其上に、三本の扇子と、其扇子が各一本宛這入るべき大きな扇面形の函を備へ、術者は演場に立現れ、一本々々に扇子を開けば、一本は松、一本は竹、一本は梅、それ〴〵違つた繪が描てありまするを客に見せてそこで術者は簡短に説明すること例の如く

演 藝 説 明

術「只今三本の扇面一々御高覽に供しましたる如く松竹梅三種となつて居ります、御面倒ながら、此三本の中、孰れでもお氣に召したのを一本

お抜き取り下され、此扇面箱にお入れ下さつて、残りはお客様方で確とお預り置を願ます、術者は函を透かして、開かぬ扇面の何であるかを観破致すので、名づけて、千里眼と申まする』

（喋舌ながら、三本の扇子と、箱を術者は助手に命じ、観客席を持廻らせ、術者は舞臺に残り、助手は、客に松なり竹なり梅なりの中一本を抜かせ、函に入れさせ、残る二本を客に渡して、舞臺に戻り、卓の上に乗せる、術者は、其函より二三尺離れて暫時凝視て、隠袋より三枚の白紙を取り出し）

術「観客諸君、私は此扇面函の中にお客様方がお入れ下されたは、何で

あるかを、能く観破致しました、然れば、何々と、口頭を以てお答は最
と容易くはありますが、それにてはお慰みが薄いに依り、此白紙に、松
竹、梅の三字を記します』ト

〔三字を各一枚に一字づゝ認めて火を紙端に點け〕

術「函の中にあります扇の何であるかは、他の二枚は燃えて灰になりて
も其扇の繪と同じの文字は決して燃えることはありません ト

〔喋舌つて居る中、二枚の紙は燃えれど一枚だけは半分より燃えず文
字はありくと残る、函より扇を出せば果して其文字と同じ繪の扇子
である、これが此演藝の終り〕

「施術方法は原理材料の部に詳解」

手練應用之部

一 手練の球

「スキルフル、ボール」

演藝場でもお座敷にても何處でも出来るまづ術者は、球三個なり四個な
りを持つて、又細き長い紐を携へ、演藝場に立出で、鳥渡説明をすべし

演藝と説明

術「これは別段仕掛や特別装置又何等の道具も要りません、球と紐があ

れば、誰何にでも直ぐ出来まする藝術でムいますれど、併し多少の熟練が必要、サア私の手許に御注意」ト

(言ひながら、球の穴に細紐を二筋通して両端を緊と括り結び、其兩端を観客に持せ、手巾を其上に被せ、術者は、鳥渡其下に両手を入れ)

「ワン ツウ スリー」

(の氣合の聲と共に、球を抜取るのが此藝の終り)

「施術方法は原理材料の部に詳解」

二 春の胡蝶

此手術も如何なる處でも施ます最も簡易なもので、これは元來西洋奇術ではありませぬ日本流の作品であります、道具も何も要らず直ぐ素人方に出來まする故爰に掲げました偕て術者は、例の如く簡短に説明をする

演 藝 説 明

術「爰に持出しましたる白紙がムい



ます別段特別製造の紙でもなければ、又、紙に仕掛などは決して致してはありませぬ、一應紙は検め御覽に入れます—紙の検査眼済みましたれば、愈々これよりは、春の胡蝶は花に戯るゝの形』ト

（白紙を引裂き手早く數羽の蝶々の形を捻ねりて作り、扇子を擴げ、恰も生きたる眞個の胡蝶が、花に戯れ遊ぶの狀をなすのが此曲の終り）
『施術方法は原理材料に詳説』

三 脱 殻

「シエル、ヲブ、スネーク」

術者は演藝場に立現れ、一筋の細き繩を携へ軽く觀客に挨拶して

演 藝 説 明

術「演題は、シエル、ヲブ、スネークと申まするは譯名は蛇の脱殻になります、开處で術者は如何なる事を致しまするかと云へば私の肉體が骨や肉が抜出て、皮膚ばかりになつて終ふと云ふ次第かと、思召かも知れませんが、如何に魔術師の私でも、爾な事は出来ませぬ。たゞ其脱殻と題した其意味だけの藝を行ふのであります』ト

（言ひながら、半巾を出して、兩の手首を合せて、觀客に確緊と結んで貫ひ、恰も手首に繩を箝たらん如くにし、細繩を引懸け其兩端を一緒

にして、観客に緊と握り持つて、貫ひ)

術「サア、斯く致された上は、到底此繩を抜ける事は出来ませんが、これを如何にしても脱け出るか、お目留られて御一覽——」ト

(言ひながら、術者は三步四歩跡すさりして、客に持つたる細繩を引かせ)

「ワン ツー スリー」

(の氣合と共に、美事に兩の手から繩を外して、半巾も手奇麗に脱て終ふのが、此術の終り)

『施術法は原理材料の部に詳解』

四 達磨の駈落

演藝場 或はお座敷へなり、一脚の卓を置き、其上に一個の陶器製の湯呑一個と一ツの玩弄の小形の達磨を備へ置き

術者の服装はなるべく和装の方似合よく元來が日本在來の手品なれば説明も其心して説明にかゝるべし

演 藝 説 明

術「演藝場正面に備へてムいます卓上にある一個の達磨の活動を御高覽に供します、名づけて、達磨の駈落と申まするは、演藝に従ひ自然お了

解に相なります

演 藝

説明が了つたなら、術者は、湯呑を手に取り上げ、中をば充分、観客に検めて貰ひ、又備へてある、小き達磨を同じ様に、種仕掛けなきを示し而して



術「暫くの間は、湯呑の中に達磨は窮命を申

付けます」と

術者は口上を述べてポント湯呑で達磨を伏て藏ふのである

「斯く達磨は湯呑の中に柔順しく慎んで居る

めて見ませう」と

言ひながら、恐々そつと、湯呑を

達磨の形は消えて影もない

元より材があるのだから

「オヤ／＼何處へ達磨奴、駈落をしくさつたか……惜い奴だ」と探す
眞似をすると、説明者が

「モシ／＼、術者の懐中から、たるまさんは顔を出して笑つて居ますぜ」
と言はれて始めて、心づきし風に、懐中から術者は、達磨を出して客に
見せ

術「油断の出来ん達磨、今度は私の懐中に藏つて置ます」と
言つゝ、空の湯呑を再び、伏せて持上げれば、懐中の達磨は、いつの間
にか、舊の如く湯呑の中にと達磨が通ふのが此演藝の終り

「施術方法はたねあかしに詳しく」

五 不思議の紙捻

演藝場で執行ほどの奇術ではない誰にでも出来る日本在來の舊式手品で
陶器の爛徳利一本と一枚の硬固の日本生紙一葉を用意し置く

演 藝 説 明

術「爰に演じます手品は、不思議の紙捻と題し誰何にも出来る誠にお
慰みの多い至つて造作もない罪のない手品でムいます、長口上畧致し早
速演藝にとりかゝります」

演 藝 方 法

用意しある白紙を術者は、観客の目前で細く長く幾切も裂いてまづ三分位の巾にしたら、能く看客に改めて貰ひ、目前を紙捻で造り

術「お目通りにてまづ一筋の紙捻が出来いたしました偕て如何なる手品を致すやと言へば、爰に持ち出しましたる、粗末なる爛徳利まづ一應は改めて頂きます………」と



看客に検査を乞ひ、充分種仕掛けなきと定りたらば

術「斯くまでお改めを受ました爛徳利、ヨモ御胡亂はムいますまい、されば只今作りましたる紙捻にて釣上げ御覧に入れます名づけてこれを太公望は魚釣り………」と

(喋舌りながら、徳利の口へ、紙捻を差込み釣上げれば、重き徳利は軽々と釣しあがり三四度振り動かして見せ、而して、紙捻を抜いて、再び紙捻の先に何もなきと云ふことを示すのが此曲の終り)

「施術方法はたねあかしに詳く」

六 強國の同盟

演藝場正面に、三脚の卓の上に、一個の硝子コップを置き、其傍に日、英、米三國の國旗を備へ置くべし

演藝說明

「本奇術は、前に二種演じましたる如き、在來舊式の手品とは事變り奇抜にして趣味の多い、随分價值のある意志でムいます、尤もこれまでとて、多の奇術士も此術に類した事を行ひますが、大抵は二ヶ國の國旗繼ぎ分けであります、それなら最も簡易でありますれど、茲に演ずるの

は、日英米三國三流の旗を聯結致すので術者は至極、困難で、萬一仕損じは御用捨を豫め願ひ置ます

演藝

術者はまづ演藝場に現れたなら、備品の國旗の中、まづ旭旗と米國旗を持出して、二流の旗の裏と表を幾度となく繰り返しく改め

術「切望御遠慮なく、旗はお手にとつて御検査を願ひます」
 充分看客の目を通し、仕掛なきと定まつたならば、二國旗を、卓上のコップの中へ押込んで終ふのであるが、入れる前に日米の國旗の隅と隅の端を結び、二三度、客の前へ振つて確に結びしを證してコップも亦た、

充分じゅうぶんに中なかを檢あめる而さうして後のち、コツプの中なかへ、突つ込んで終しまふ

術じゆつ「儲さて御ご高かう覽らんの如ごとく、二國こく旗きは首しゆ尾びよく結むすび合あはしたまふ、コツプの中なかに入れ置おきたるが爰こゝには又また、一流りうの英國えいこくの國旗こくきがムこいます、何卒どうぞ御ご面倒めんどうながらお改あらめを願ねがひます」と

術者じゆつしやは自みづから英國えいこく々旗きを看けん客かくに改あらめて貫もり而さうして、別べつに不ふ審しんなしと決きまりしならば、其國そのこく旗きは、コツプより離はなして置おき、コツプの上うへには、半巾はんけんを覆かぶせて置おき、術者じゆつしやは、英國えいこくの國旗こくきを再またび手てにして

術じゆつ「これより、日英にちえい米まい三國こくの國旗こくきは聯れん結けつ致ちさせます、首尾しゆびよく、三國こく同盟どうめい致ちしましたれば拍手はくしゆ御ご喝かつ采さいを願ねがひます」と

と言いひながら、手てに持もつ英國えいこくの國旗こくきを段々だんぜんと兩方りやうほうの掌てのひらの中なかで、揉もみ消けして終しまひ、兩手りやうてを開ひらけて觀客けんかくに見みせ

(術者じゆつしやはコツプの上うへの覆おほひの手巾ハンケチを除よけて、二本ほんの指端ゆびさきで徐々じゆぜんに摘つみ出しにかゝり、一寸ちゆつと、旗はたが出でたらばグイと一べん遍べんに引ひけば、ゾロ／＼と日にち米まいの結むすばれた處ところは離はなれて日英にちえい米まいと三國こくの國旗こくきが結むすばれて出でるのが此奇このき術じゆつの終しまり)

『施術方法やりかたは原理材料たねあかしに詳解くはく』

七 深草の水

演藝場の中央程よき位置に、美しきテーブルクロスを掛けた、卓を置き、硝子製一個の洋盃と水差しに水を入れて備へ置き、用意整ふを俟つて術者壇上に現はる

演 藝 説 明

本演藝は、術者に因りて思ひくの演題をつけまする、或る奇術士は、これを飛行の水と名づけました者があります、私はこれを深草の水と名をつけました、演題は怎うでも好として早速奇術にかゝります

演 藝

術士は備つけの洋盃を持出し、観客の面前で充分に検め、然る後洋盃の

中へ、水さしの水を満々と注ぎ入れてから

術「御目通りに於て、御覧の如く水は洋盃へと注ぎ入れましたれど、猶今一應水は舊器へとかへし検めまする」

と水差の中へ、ザットあける

術「水と洋盃に御胡亂ないならば」

と再び件の水さしより洋盃につぎこむ

術「偕て最前の如く、洋盃の中は満々と水が這入つて居ります、偕て此水は何處方へか消えて失なる………」

と言ひながら、洋盃を逆さに二三度振り動かするも一滴も水はこぼれず

観客より喝采あらば、洋盃は再び舊形にと直し

術「消え失せたる水は、再び舊へと歸へる、深草の少將は、通ひの水……」と

（叫びながら、洋盃を改めれば水は満々となつて居るのが此藝の終り）
「施術方法は原理材料に詳解」

八 實と眞色の染分

演藝場には、卓の上に、奇術用のハンケチを用意し置く、術者は徐に現はれ

演 藝 説 明

術「本演藝は、お座敷手品といたしては誠に簡易で、そして綺麗なお子供衆方なぞには、至極適當なのであります、長口上は畧致し、早速ながら、取つて御覧に入れます」

演 藝

術士は、観客に對つて、持ち出したる、三枚の白ハンケチを一枚づつ、充分に裏と表を丁寧^{ていねい}に検めて、卓の上に置き

術「只今御検査を仰ぎましたる、白き三枚のハンケチを各々三色に染分けるのでありますが、如何に何でも此まゝでは、變色はいたしませんま

づ、茲こゝに一枚まいの白紙はくしがあります」と

又またも其その白紙はくしを檢あめ、然しかる後のち、手許てもとの方ほうから、圓形まるがたに卷まいて、中央まんなかを紙こ捻よりで結ひすで置おくと鳥渡筒形ちよつとつがたになりますると

術じゆつ「まづ急製きふこしらへへの紙筒かみづに、染分そめりけるハンケチは一枚まいくくと差入さしれまして御覽ごらんに入いれます」と

一枚まいづゝ、筒つの中なかへ三枚まいを入いれ終おつたならば

術じゆつ「此方こちより一枚まいづゝは抜き取とりまして御高覽ごかうらんに供きします」と

差入さしれた方ほうでない口くちから、細ほい竹たけを入いれて一枚まいづゝハンケチを引張出ひ、はりだす前まへに

術じゆつ「第一だいに現あらはまする染分そめりは、レツドカラアあかいろ(赤色)であります、第二だいづ

ラツクカラアくろいろ(黒色)第三だいがブリユーあをいろ(青色)であります」と

(一々その染分そめりの順序じゆんじよを述のべて置おいて引出ひきだせば一々その其如ごとくに染分そめり出る)

術じゆつ「御目通おめとほりに於おいて首尾しゆびよく演えんじましたれど、即製そくせい此紙筒このかみづを此こまゝにし

て御慰おなぐさみが薄うすい………」と

(言いひながら、此筒このつをほぐして舊もとの一葉えふの白紙はくしにするのが此藝このげいの終おり)

「施術方法やりかたは材料原理たねあかしに詳解くはしく」

九 浮 れ 烟 管

演藝場は、これはお座敷でも何處でも出来るのであります

演 藝 説 明

術「當曲藝は誰何にもで出来る極おやさしき舊式の手品に聊か改良を加へましたので、手数もかゝらず一本の煙管が踊出すといふ珍妙不思議、お躰の宿がへの奇術、長口上は畧いたし早速演藝にとりかゝります」

演 藝

(術士は、演藝場に立ち現はれるが、何物も持たない)

術「樂舎内より持參の煙管ではお慰みが薄い、決してお粗末には取扱ひませぬから、切望、お客様から御拜借を願ひます」と

看客の中より、筒下げの煙草入れを借て来りて

術「只今、お客様より御拜借のお煙管は一應改めまして御覽に入ります」

(と改め検査を済ませて、筒の中へと入れる)

術「御拜借の煙管、筒中に入れました、首尾よく活動いたしましたならば御喝采あらんことを願ひます」と

(言ひながら、筒の煙管は面白く活動をはじめて、出たり入つたり、自然に動き出したならば、煙管を抜きとり再も検査して借りて来たお客様にそれを返却するのが、此演藝の終り)

「施術方法は原理材料に詳解」

十 奇怪の果物

演藝場の正面に飾置く卓の上に一顆の蜜柑（蜜柑に限らず何にてもよろし）を載せ置くべし）

演藝説明

術「只今お好に従ひお座敷奇術の一であります、原名を「キューリアスフルーツ」と申ます、極く簡易な开して趣味ある魔術を御高覧に供するに就ては、これを奇怪な果物と命名致しましたは、如何にも其名に背かず奇妙な果物であります、何故なれば、果物の中へと銀貨なり金貨なり

自在に吸こませる何と珍らしい果物ではありませんか……長口上は時間妨げ早速演藝にとりかゝります」

演藝

（術士は説明の了ると同時に、卓上備へつけの蜜柑を手に取り、看客の眼前に持ち廻り充分検査を乞ふべし、検査を終り、蜜柑に材仕掛なしと決定りし上は、一方の手に摘み、卓上に置く）

術「時に看客諸君の中から、何誰でも宜敷い、御面倒ながら、十錢銀貨を御拜借を願ひます、これは樂舎から持出してはお慰みが薄いで、御無心を致す次第で……」と

(客より借り来らしめ)

○「只今御拜借の銀貨は、お目の前にて………」と

(言ひながら白紙に包んで終ひ)

○「御高覧の如く正に包みましたる、白紙の中なる銀貨、雲か烟の如く消え失せ……彼方卓上の果實の中にと通ふ……エースト——」と

(掛聲をして、白紙を被いて見せる、銀貨は何時の間にか影も形もなく失せて居る)

○「御目通り首尾よく、御拜借の銀貨は消えてなくなりは致しましたが

彼方菓物の中に、通ひましたであらうか、蜜柑は二つに切斷して改めま

す、豫定に遣はず、銀貨が通ふて居りましたら拍手御喝采の程を願ひ置

ます」と

(洋刀を手にして、蜜柑の中央より真二つに裁斷すれば、銀貨現れ出づ

るが此藝の了り)

「施術方法は原理材料の部に詳解」

十一 反 魂 香

演藝場の程よき位置に、卓を据ゑ置き、其上に演藝に使用すべき一葉の繪葉書を備へ置くべし

演藝説明と演藝

術士は徐々と演藝に現れ、簡単な挨拶をすませ、而して後ち少しく滑稽口調にて



魂香がなくとも、この奇術を行ひさへすれば自由自在に反魂香の代用を致します、偕て爰に持出しましたる……」

○「本演藝を名づけて、

反魂香と號しましたるは

大に故ありで、昔、唐の

國にありしと聞く名香反

（と言ひながら、卓上の備へてある美人繪葉書を手にして）

○「私は反魂香の逆手から遣ひますと申上たばかりでは此度お判り難う

ムいませう、开も反魂香は

何もない處へ姿が現はれま

すが、私は有る繪姿を搔き

消し再びそれを現すのでム

います」



（と喋舌りながら、看客に其繪葉書を検査して貰ふ、それより一枚のハ

ンケチを取出しこれも極めて然る後ちに、繪葉書を柀へ箆めて其ハン

ケチを被せ)

○「御面前充分にお検ためを願ひましたる、繪葉書は、右の手から、左の手へ持替へまする其瞬間に美人の姿が消えましたら御慰み……」
（と説明して、右手から左手に繪葉書の枠を持ち替へて、被せたハンケチを取り除けると、跡方もなく、美人の繪姿は掻消す如くに失なつて居る）

○「御覧の如く美人の繪像は抜き取りましてムります、併しこれのみでは面白くもなければ、お慰みも薄い只今抜取りましたる、美人の姿は、再び現しまして御覧に入れます」

（と再もや、最前の如くハンケチを被せて、今度は左の手から右の手へと移してハンケチを除ると以前の繪美人は現はれ出るのが此演藝の終り）

『施術方法は原理材料の部に詳解』

十二 無敵の衣

演藝場中央程よき位置に、一脚のテーブルを備へ、其上に、片袖と鋭利なる洋刀若くは短刀を載せ置くべし

演 藝 説 明

○「本演藝は、術士に依つて、豫裏の衣とも申ます決果衣類を、無暗矢鱈に洋刀なりヒ首なりで突き刺すので、尤も突刺て穴が明たのでは面白くもなければ、奇術でもない、如何相成りませふか、術士の演藝を御高覧の上御喝采を豫めお願い申上ます」

演 藝

術士は演壇に立つて、此奇術は餘程奇々怪々には見えませんが、誰何にでも出来ます……此處に持出したる……

(と言ひながら、卓上の片衣を左手にとつて、観客に検めさせ洋刀を右手にとつて)

○「洋刀は決して鈍刀や玩弄の刀ではありませぬ、私の首の二つ三つは即座に砍り落す事が能ます程の鋭利なる刃物にムいます」

(と傍の紙を何枚となく砍

り小間裂て見せなどして

二三度片袖を突刺すと、

美事に穴が明くと)

○「御覧の如く刃物は検査

を致し御胡亂はない筈併し

樂舎内の衣類では御慰みが薄い決してお粗末には取扱ひは致しませぬ、



何卒お客様方より羽織を御拝借願ひたい」

（と観客に頼んで一枚の羽織を借り来り）

○「御面前御拝借の結構なる御召物、洋刀を以て突き刺し、御覧に入れます」

（と言ひながら、ツブリ／＼と洋刀を借物の羽織へ突き刺し、而して突き刺したるまゝ観客の方にそれを其儘見せながら）

○「斯の如く、洋刀は、御拝借のお召物に突き刺さりましたからには、开處だけは必ず穴が明くのが道理であります、明たのではお慰みがない又奇術でもない……サアお目留められて御一覽」

（と言ひながら）

「エー ストー」

（と氣合と諸共、手早く引抜き、羽織を投げ出す、後見人は拾ひ取り、充分一般の客は勿論、貸主へも検めて貰ふ、露ばかりの刀の痕鵜の毛で突た疵のないのが此奇術の終り）

「施術方法は原理材料に詳解」

十三 キウリアストランプ

演藝場程よき位置に圓形の卓を備へ其上にトランプを載せ置くべし

演 藝 説 明

○「本藝題のキュリアス、トランプは呼んで字の如くキュリアスとは珍奇トランプは骨牌、要するに珍奇な骨牌となります、如何なる珍奇を演じますかは術士に就て御高覧を願ひます」

演 藝

○「此奇術は趣味が誠に深く、怎んな、御幼年の坊ちやん嬢ちやんでも能ます偕て……」

（と術士は前口上を述べて、卓上のトランプを手にして例の如くトランプ（骨牌）を散々に丁寧に切り而して一枚一枚に、トランプを客に見せ）

○「御覧の如り、此トランプの中には、点数ばかりで一葉も繪札はござ

いません」

（と充分に繪札なきを示したる後ち）

○「斯く反覆丁寧に検査済みと相成りました点数のみのカルタは悉く繪札と取換て御覧に入れます」

（と言ひながら、点数のみの骨牌を卓の上に載せ其上にフツフツと二度ばかり息を吹掛けてから）

○「最早………点数のみの骨牌は悉く繪札と變化つて居ります」

（と骨牌を手にして、バラ〜と切りながら骨牌のコバだけを見せれば

悉く繪札であります)

○「御覽の如く、繪札とはなりましたが、此まゝでは興味がムいませぬ
再び以前の點數にして御覽に供します」

（と再もや、三度ばかり息を吹掛けて、改める時は悉く最初の點數のみ
となつて、繪札の影も形もなくなるのが此藝の終り）

（施術方法は原理材料に詳解）

十四 魔法の骨牌

演藝場の備品は前の術と同じ

演藝説明

○「骨牌の奇術は種々さまざまありますが、本藝は奇抜で開して、術
さへ慣れますれば簡易に誰何にでも出来ます。魔法なぞと大袈裟な題名
をつけましたが、それ程愕くやうな奇術ではありません、たゞ手先の早
いのが價值、お目とめられて御一覽」

演藝

（術士は、卓の上から、備付の一組のランプを持ち出し、例の如く切
り其中より一葉の骨牌を抜て貫ふために、観客席へ持ち廻り）
○「中から一枚、誰何でも構ひませぬ何卒お抜き取り下さい」

（と観客の中一人に、一枚を抜き取らせ（其骨牌の点数）を見覺へ置いて貰ひ）

○「御面倒ながら、此カルタを豎に引つ裂いて下さい……………」



（と客人に頼んで、カルタを縦に裂て貫つたら術士は再び他の観客に對ひ）

○「御面前に於て、引裂て頂きませ



したが此二裂になつた、片々を何誰でも宜敷です片方の裂たやつをお預り置を願ひます」

（と半片を客に預け、残りの半片を術士の方に残しこれを又、客人に依頼して白紙二つ折にして其中へ包装で貰ひ、端の箸に摘んで）

○「御覽にとほる如り、術士は一切手をつけませす斯如くに致したるものを火中に掛けます……………」

（と蠟燭の火に燃へやして小さな容器の中で燃さしを受る）

○「斯の如く焼棄てましたる骨牌の半片はこれなる林檎より現はして御覽に入れます」

（と林檎を客に檢めさせ然る後に林檎を洋刀を持つて切斷すれば、最初焼毀したる骨牌は林檎の中より現れ出るそれを手にして）

○「御覽の如く首尾よく、一旦火中にかけた破片は恙なく果實の中より現れましたが、お客様にお預け致したのと違つて居つてはお慰がない、一つ符合して御覽に入れ、首尾よくシツクリと合ひましたら、御喝采を願ひます」

（と客人に預けてあつた、半片の破骨牌と合して見ると一分一厘の隙なくシツクリと符合するのが此藝の終り）

「施術方法は原理材料に詳解」

一五 寶の杖

演藝場には何等の装置にも及ばず

演藝説明

○「此奇術は眞の手先の早業でありますから餘程熟練を要します。尤も寶の杖と題しますから、何でも好める貴重品は出るのですが、爰には珊瑚の珠を出して御高覽に供します」

演藝

（術士は徐々と樂舎から、演藝場程よき處まで左の手にウオンド（魔の杖）を携へて進み出で）

○「此杖は一名を寶の杖と申しますが、眞の名はウオンド魔の杖と云ふの

が正當でまこといます、如何にもいかに立たたつた妙々不可思議の杖つゑであります、此杖一本ありさへ致せば、如何なる欲する貴重品も手に入れる事ができます
(と大法螺を吹きたて、杖を客に検めさせた後ち)
○此魔杖を一つこきあげますれば、世にも稀なる珊瑚の大珠が現れます
す』

(と言ひながら、杖をシゴクと、果して珊瑚の大珠が轉がり出るのが此藝の終り)

「施術方法は原理材料に詳解」

一六 變化蠟燭

演藝場中央に、方形卓を置き、其上に、二基の蠟燭立に二本の蠟燭に火を點じ置く

演藝説明

○此奇術は日本古來から在りました舊式の手品で簡易に致して、費用もかゝらず、開して誰何にでも出来ます、烏渡趣味があります』

演藝

(術士は演藝の席程よき位置に立つて、火の點じある蠟燭を指にてさし

示し

○「題して本藝を變化蠟燭と申しますが、材料が分れば何でもない事ですが、如何にも材の了解らぬ中は不思議であります、今、火の點じて居ります蠟燭の燈火は吹き消して、直に、燐火一本も疎か、線香一本の火だに用ひず、指端で再び燈火を點じて御覽に入れます」

（と言ひながら、プツプツと、蠟燭の火を吹き消し然る後ち、直に、指の端にて、蠟燭の心をチヨイト叩くと、バツと再び舊の如くに燈火がつく、斯くする事二度び三度びにして、此藝の終りとする）

「施術方法は原理材料に詳解」

一七 掌中の旗

演藝場には何等の備品を要せずと雖、便利上一脚位の卓を置くも差支へなし

演藝説明

○「奇術の中には、骨牌と旗の演藝は誠に數多ございますが、此藝は、旗の部類の奇術の中で一番六ヶ敷のであります、仕損じは幾重にも御容赦を豫め願つて置ます」

演藝

術士の服装は洋服を可と致します

〔術士は徐々に演壇に立つて〕

まづ兩の手を擴げ、左右の

掌の裏と表を、觀客に充

分見せ)

○『兩の掌には、何物をも

藏してはゐりません單に口端

ばかりではなく、只今充分御

面前にて檢めましたる如くで



ありますが、兩の掌中から各國の國旗を揉み出して御覽に入れます』

〔と言ひながら、まづ一葉の國旗を掌中から揉み出し、又一葉又一葉と

五六ヶ國の國旗を拿りだして、演藝場の左右に糸を引かせ其糸に取り

出した國旗を結びつける〕

○『斯く御覽の如く、各國々旗は聯結は致しましたが、これのみでは、

御慰みも餘り深くはない、たゞ今此處に一羽の鳩を現はします』

〔と言ひながら、三國三枚の國旗を、掌の中に揉みこんで居る中に、掌

の中より一羽の鳩が飛び出すのが、此藝の終り〕

『施術方法は原理材料に詳解』

一八 盆 燈 籠

演藝場中央に備へある卓の上には、一個の絹帽を載せ置くべし

演 藝 説 明

○「此演藝は大體は日本式であります、興味を多く致す爲めに、最新なる西洋奇術の一部を加味致しました、藝の脚色を簡短に説明すれば帽子より數多の手毬を取り出し、これを角形な函の中へと入れこれが燈籠に變化致すのであります」

演 藝

（術士は演壇上に現れ、而して卓上に備へある絹帽を手に持ち來り、帽子は充分に觀客に檢めて貰ひたる後ち）

○「斯の如く充分お檢めを願ひましたる上は豈夫帽子にはお疑ひは無い
ますまい……中よりは一品取り出し御一覽に入れます」

『エースト』

（と掛聲をして、帽子の中から、一個づつ、小さき手鞠を摘み出しては卓上に載せ、悉皆出し終つたなら）

○「まづは首尾よく帽の中より斯く、數多の手毬は現れ出ましたが、これなる手鞠は、爰に亙います四角な函の中へと入れ、就ては此函も

御面倒ながら、一應お客様方に於て御検査を願ひ上ます」

（と件の函を看客席に持廻り、材料仕掛けなきを確めて貰ひたる後、手鞠を詰め込みて一杯にして終ひ）

○「只今詰め籠ましたる手鞠は、大なる變化を致します」

「バース」

（と掛聲を致して、函の蓋を開けば、中より火の點じたる美事の盆燈籠が現れ出るのが此藝の終りとなる）

「施術方法は、原理材料に詳解」

一九 彌生のハンケチ

演藝場には一脚のテーブルを据え、其上に奇術用の半巾を載せ置くべし

演藝説明

○「この奇術は至つて美術的のお座敷手品で舞臺でもお座敷でも兩様に用ゐられます、容器の中よりは何品にても出し易いのでムいませすが此奇術は一枚の手巾を以て美しき花を出すので鳥渡手際ものであります、首尾よくまゐりましたら拍手御喝采の程を願ひ上げ置ます」

演藝

めて貰ひ、後ち、術士は一本の細い一尺二三寸の棒を持つて来り」
 ○『御検査済と相成りましたるハンケチよりは美しき花を取り出し御覽
 に供へます』
 (と言ひながらハンケチを左腕に巻いて、それから右の棒を二三度振り
 動かし)
 『エーストロー……』
 (の氣合を掛け、體を二三度振り動せば忽ち、美しき花を取り出すのが
 此藝の終り)

『施術方法は原理材料に詳解』

(術士は演藝の席上に現はれ一輯の後ち卓上のハンケチを手にして)
 ○『持出しましたるハンケチ決して材料仕掛等はムいませぬと言つて自分決めでは何もなりません御面倒ながら、例に依て例の如くお客様方に御検査を願ひます』
 (と口上を述べて自身其ハンケチを看客席へ持ち廻り數名に改



二〇 智 惠 の 輪

演藝場中央に一脚の備つけの卓を据え其上に奇術用の輪を載せ置くべし

演 藝 説 明

○「此奇術は元來清國より傳來致しましたるを改良を加へ努めて目新しく面白く取仕組御清覽に供します巧みにこれを使ひましたらば例に依て御喝采の程を願ひおきます」

演 藝

(術士は壇上に現れ看客に丁寧に挨拶の辭を述べ然る後ち)

○「此奇術は鳥渡趣味のあります手品で、誰何でも老えの深い方は直ぐ能きます、尤も使用法は種々御座いますが、澤山の輪を使用致す程、それだけ多の興味があります私が私には只今五個までを自由に使ひます偕て」

(と小輪五個附着したる大なる鐵輪を持出して見せる「此大輪と小さい輪は鳥渡は誰が見ても、放れくにはならざる様に思はれる」

○「御覽の如く、大輪と小輪とを、放すには、尋常では放れません、まづ斯ふ致すので」

(と二振り三振り、大輪を振り動かして、一の小輪を抜き)

○「首尾よく一の輪は抜きましたが残の二が六ヶ敷いのであります」